
Memento mori - 或は死者の為のミサ

雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e m e n t o m o r i - 或は死者の為のミサ

【Nコード】

N 6 3 1 7 X

【作者名】

雪風

【あらすじ】

俺にとって、戦争は遠い世界の物語だった。

C・E・70 7月。東アジア共同体日本自治区に住んでいたシン達アスカ一家は、コーディネイター迫害から逃れるために、オーブに移住した。

ナチュラル・コーディネイター平等を謳い、中立を宣言したオーブが、戦争に巻き込まれる筈がない。そう信じて

そして、C・E・71 6月15日は訪れる。

俺にとって、戦争は遠い世界の物語だった。

古くから遺伝性の病気に悩まされてきたアスカ家にとって、コーデイネイト技術の確立はまさに福音だった。

父さんの父親　つまり、俺に取っては祖父にあたる人物は、死に物狂いでお金を工面し、己の子供にコーデイネイトを施した。生まれてくる子供に自分と同じ苦しみを与えたくない。その一心で。そうして生まれたのが俺の父さんだった。

時代が第一次コーデイネイターブーム真っ只中のこともあって、遺伝性の病気をなくす為にコーデイネイトする人々は多く、さして珍しい話ではなかった。

コーデイネイトを施してもなお、不安だった祖父は定期的に父さんを病院に通わせていたらしい。そこで出会ったのが母さんだった。母さんも父さんと同じように、遺伝性の病気の因子を排除するコーデイネイトを受けていた。

似た境遇にあった二人が惹かれあい、恋に落ちるまでそう時間はかからなかった。

もちろん反対もあった。遺伝性の因子を排除するためにコーデイネイトを受けた人間同士が結婚し子を成した場合、その子にどのような影響が及ぼされるか全く予想が出来なかった。どちらかの病気が発現するかもしれない。最悪、両方もあり得る。安全性、確実性が引き上げられたとはいえ、コーデイネイト技術は未だ不安定な部分多かった。似た問題を抱え、弄った遺伝子同士が結びつき、その結果生まれる子供にどのような影響が及ぼされるか。

そんな周囲の反対を押し切り、父さんと母さんは結婚した。そうして生まれたのが俺　シン・アスカだった。

俺が生まれる数年前に、出生前の人間に対するコーデイネイトは

既に禁止されていたが、まだお金を大量に積みあげておかない時期だった。俺に遺伝性の病気が発現しないように父さんと母さんは祖父と同じように死に物狂いで働き、金策に走った。それでも、集められたのは健康面に関するコーディネイトを施せるギリギリの金額だった。父さんと母さん、そして当時はまだ生きていた祖父達の祈りと願いを一身に受け、俺はこの世に生を受けた。

健康面へのコーディネイトは完璧に行われ、俺に遺伝性の病気の因子は見つからなかった。

だが、コーディネイト技術の不安定さが俺の身体的特徴に現れた。容姿を調整する遺伝子を全く弄っていないにも関わらず、俺の瞳は赤、肌も白かった。

生まれた時はアルビノ、メラニンの生合成に係わる遺伝情報の欠損により、先天的にメラニンが欠乏する遺伝子疾患が発現したのではないかと青褪めたらしいが、様々な検査の結果、俺はアルビノではなくどちらかという白変種に近いという結果が出た。白変種にしては瞳が赤いのは気になるが、視力の低下や皮膚が赤くなる日焼けも見られないというのがその理由だった。

勿論、この結論が出るまで病院通いからは免れられず、大丈夫だと太鼓判を押されるまでに、俺が生まれてから実に5年もの歳月を要した。

俺の健康問題に一段落が着くと、父さんと母さんは俺に、一人っ子では寂しいだろうと口にするようになった。そして、俺が6歳の頃、妹のマユは生まれた。

マユが生まれる頃にはもう、生まれてくる子供にコーディネイトを施す事は完全に不可能になっていた。その為、マユが病気を抱えて生まれてくるかもしれないと、俺も父さん達もとても心配した。けれど、その心配は杞憂に終わった。マユは無事に生まれてきた。しかも、俺の様に様な白変は見られず、父さんと母さんそれぞれに似た茶色の瞳と色のある肌にみんな安堵した。

直射日光に晒されたら視力が落ちるかもしれない、紫外線に当た

れば質の悪い日焼けをするかもしれない。診断結果がでるまでは、俺は滅多に他の子供の様に外で遊ぶ事もなければ、外出することも出来なかった。外出するのはせいぜい病院に行く時ぐらい。マユにそんな日々は送ってもらいたくなかった。

マユが生まれ、家族が増え、幸福な日々が続いて行くはずだった。だけど、そんな日々も長くは続かなかった。

俺が住んでいた東アジア共和国日本自治区は比較的コーディネーターに寛容な地域だった。だが、C・E・70年初めにおきたコペルニクスの悲劇から始まる一連の事件 血のバレンタインに端を発するエイプリールフルクライシスなどをきっかけに、コーディネーターへの風あたりは徐々に強くなってきた。

無理もないだろう。無差別に投下されたニュートロンジャマーは、地球に甚大な被害を齎した。

日本も例外ではない。いくら日本自治区がコーディネーターに寛容な地域だったとはいえ、領土内にニュートロンジャマーを落とされたらたまったものではなかった。しかも、領土が狭いにも関わらず、本土に落ちたニュートロンジャマーは2基。その被害は大きかった。

日増しにコーディネーターへの嫌悪は大きくなっていった。特に、俺の様に一目でコーディネイトされているとわかる容姿を持つ人間は外に出ればあからさまに白眼視された。

”悪いのは宇宙にいるコーディネーターであって、地上にいるコーディネーターではない。彼等もまた、我々と同じように被害者なのである。”

そう何度も政府やマスコミが喧伝しても、コーディネーターに抱かれた悪印象は払拭されなかった。

俺への迫害が顕著になるにつれ、父さん達はある決断をした。

”オーブに行こう”、と。

「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない」という理念を掲げ、コーディネーターも受け入れると中立宣言を行

ったオーブならば、俺達も安全に暮らせる。

祖父が生きていれば反対されていただろうが、その祖父も数年前に亡くなっていた。

生まれ故郷を離れるのに抵抗がなかった訳ではない。

祖父が好きだった桜の花が見れなくなるのが嫌だった。

今年は、エイプリルフルクライシスのせいで、毎年行っていたヨシノへの花見ができなかった。移住してしまえば、今度はフシミへ紅葉狩りにも出かけられなくなってしまふ。それも不満だった。それに、俺をコーディネイターと知ってもなお、親友だと言ってくれる幼馴染と離れるのも嫌だった。

だが、それらより、何より一番嫌だったのは、大好きだった祖父の墓を置いて行くことだった。

けれど、俺達が迷っている間にどんどんコーディネイターへの風当たりは強くなっていった。日本自治政府がコーディネイターに寛容でも、その上の東アジア連合共同体が反コーディネイターの色を強くしていたのだから仕方がなかったのかもしれない。

情勢が落ち着くまでの一時的な移住。

そう言っただけ俺達はオーブに移住した。

オーブでの日々は穏やかだった。学校に通い、クラスメイトと遊び、時にはマユと一緒に散歩したり。

ゆっくりと日々が流れていく。

その頃の俺にとって、戦争とは画面の向こうで起こるものであって身近なものではなかった。

”オーブは中立だから”

それが俺達家族の口癖だった。

どこそこで戦闘があった。どこそここの国が内紛状態になった。

全てが画面の向こうの出来事であり、中立であるオーブには関係ない。本気でそう思っていた。今思えば馬鹿な話だと思う。戦争は

常に隣り合わせで、俺達がオーブに来るきっかけになったのも戦争
だったというのに。

そして、運命の日がやってくる。

n e x t

I n t r o i t u s - 入祭唱（後書き）

作者、一人称修行中に、読みにく部分、誤字脱字などがございましたら、感想にてびしばしご指摘、ご指導ください。

K y r i e - 救憐唱（前書き）

微グロ表現あり。

注意してください。

Kyrie - 救憐唱

C.E.711年6月15日

いつものように起きて、父さん母さん、マユにおはようと挨拶をした。

父さんは新聞を読みながら、母さんは朝ごはんを作りながら、マユは朝ごはんを食べながら返事を返してくれた。

どうやら今日は俺が一番最後までらしい。

早く食べなさいと急かす母さんに生返事を返しながら、俺はトースターにパンをセットした。

マーガリン、ブルーベリー、ストロベリー、マーマレード。

ここはブルーベリー一択と瓶に手を伸ばす。

「マユ、ごはんの時くらい、携帯はしまっとけよ」

「はい」

気のない返事を返しながら、マユは膝の上に置いていた携帯をテーブルの上に置いた。

そして、しぶしぶと食パンを手に取り、ストロベリージャムの瓶に手を伸ばす。

「また生でパンを食べるかよ、マユ」

「いいでしょ。マユはこれがいいの。お兄ちゃんはパパと同じでしっかり焼いたのがいいでしょ?」

そう言っマユは俺の方にトースターを押しやってくる。

トースターにパンをセットすると、僕はマユのマグカップに牛乳を注いだ。

「ほら、牛乳。飲まないと身長伸びないぞ」

「マユはずっと小さなままでいいもん。お兄ちゃんの方こそ、ちっちゃな男の子なんてかっこ悪いから、お兄ちゃんがいっぱいなんだら?」

マユの牛乳嫌いは筋金入りである。

俺は溜め息一つ吐くと、席を立った。

「母さん、オープン使っていい？」

俺が何をしようとしているのか気づいて、母さんは笑った。

「ふふふ。爆発させないようにね」

「父さんの分も頼む」

便乗してマグカップを差し出してきた父さんに、俺は苦笑した。

「僕はホットミルク係じゃ…」

「マユの牛乳にはハチミツいっぱい入れてね！ お兄ちゃん！」

「ママの分もお願いね」

「父さんのは何もいれなくていいぞ」

続けざまに発される注文に、俺は肩を落とす。

「「「ホットミルク係さんよろしく!!」」」

「はいはい…」

ほがらかな合唱を背に、俺は三人に背を向けた。

三個のミルク入りマグカップをオープンに突っ込み、適当な時間加熱すれば即席ホットミルクができる。

あとはハチミツなりココアなり、好きにするのが俺の家の流儀だった。

長すぎると爆発するが、短すぎてもぬるくなる。

鍋にミルクを入れてe t c .の過程の手間が面倒だった俺が思いついた方法だった。

多少の思考錯誤はあれど、すぐに丁度いい時間を見つけて、俺は毎朝みんなにホットミルクを出していた。

この日もいつもと同じように、俺はホットミルクの準備をしていた。

ホットミルクが出来上がり、みんなで一息ついた頃だった。

そろそろ出勤しなければと動きだした父さんを見て、俺も皿洗いをしようと立ち上がる。

「あら？ いいのよ、シン。もう出ないと学校に遅刻しちゃうですよ？」

「まだ大丈夫だよ。マユ、いい加減野菜食べちゃえよ。じゃないと、約束してた携帯ストラップ、買ってやらないぞ」

「うー…」

唸るマユの頭を撫でると、流しへ持つていこうと更に手を伸ばす。

その時だった。

耳を貫く重低音。

壁を越し、町中に響き渡る大音。

それがサイレンであると気付いたのは数拍置いたあとだった。

母さんは慌ててテレビのスイッチを入れ、父さんも玄関からリビングへと戻って来ていた。

『C・E・71年6月15日午前XX時XX分。オーブ連合首長国は大西洋連合より宣戦布告を受けました。』

同時に、大西洋連合はオノゴ口沖より領海及び領空を侵犯。モビルスーツの部隊が本土に近付いています。市街地が戦場になることが予想されます。

国民の皆さんはすみやかにオーブ軍の指示に従い避難して下さい。繰り返します…』

どのチャンネルでも同じことを言っていた。

俺達はテレビを愕然として見た。

オーブが戦争に巻き込まれるなんてあるわけがない。

そう思っていたのに。

テレビは各地区の避難経路を映し出している。

どうやら俺達家族が住む場所は戦闘区域のド真ん中らしい。

「逃げるぞ…」

父さんがポツリと言った。

「最低限の荷物を持って。とりあえず逃げるんだ！」

そう言っただけで父さんが家族を促した。

茫然としていた俺達はそれを聞いて慌てて動き出す。

俺がスニーカーを履き外に飛び出ると、道には車が溢れ、沢山の人が我先にと非戦闘区域を目指していた。

その鬼気迫る空気に思わず俺の体は立ち竦む。

追って出てきた父さんが道路の状態を見て唸った。

「……裏手に回ろう。少し遠周りになるかもしれないが、裏側の道なら、車も少ない筈だ」

俺の家の裏手の道路は道幅が狭く、普段からあまり車の通らない道だった。

こんな状況ではどうなっているかわからないが、それでも見てみる価値はある。

裏手を見てくると父さんは消え、母さんが簡単にまとめた荷物を俺に手渡した。

「マユ！ 何してるの！？急いで！！」

いまだ家の中にいるマユに母さんが声をかける。

お気に入りの茶色い鞆を肩にかけ、マユは不安そうに出てくる。

その手にはしっかりと携帯電話が握られていた。

「マユ、携帯を持ってくのはいいけど、鞆の中にいれとけよ。落としちゃうかもしれないだろ」

こんな時でも携帯電話を手放さないマユに、俺は溜め息をついた。

神妙に頷き、マユが鞆に携帯電話を入れた所で裏手を見に行っていた父さんが戻って来た。

「裏側なら表より人も車も少ない。急ぎなさい」

戻って来た父さんの言葉に俺達は頷き合い、走り出した。

みんなで必死に走り、なんとか市街から脱出した。

途中戦闘が始まったのか、背後から砲撃音や破壊音が聞こえる様

になった。

俺達の頭上をオーブのモビルスーツ部隊が通り過ぎ、軍用車が道を疾走する。

戦車とも何度かすれ違った。

市街を抜ける直前、振り返った俺が見たのは、攻撃を受けて火の手があがり、破壊される街の姿だった。

その時はまだ、俺はこの最悪の光景を最も忘れないだろうと心から思っていた。

「この山を越えれば、避難船が出る港だ！ みんな大丈夫か！？」
父さんが声をかけてくる。

俺にはそれに返事をする気力もなかった。

ただ、走るのに必死だった。

息は詰まり、何度も唾を飲んだ。

心臓はばくばくとうるさく、胸が酷く痛んでいた。

それはきつと、前を走る母さんやマユも同じだっただろう。

いや、マユの方が辛かったと思う。

幼いマユがあれだけの距離を走ったこと事体、俺にとっては驚きだったのだから。

山を全速力で登り、下る。

途中、岩に滑って転びそうになるも、なんとかこけずに走り続ける。

ふいに、上を何かが滑空する音と共に、低い爆音が轟いた。

思わずみんな立ち止り、不安げに周囲を見回す。

もうすぐ港だというのに。

心配になり、俺は父さんに話しかけた。

「父さん！」

「あなた……」

不安そうに母さんも父さんを見上げている。

マユはすっかりと母さんと手を繋ぎ、恐ろしげに周りを見ていた。「大丈夫だ。目標は軍の施設だろう」

そう言って父さんは明るく言って俺達を元気づけてくれた。

「急げ、シン」

一番後ろを走っていた俺が心配なのだろう。

異常はなかったとはいえ、幼い頃の病院通いや諸々の要因で外に出る事が少なかった俺は、あまり体力がある方だとは言えなかった。

俺が頷くのを確認すると、みんな走り始める。

港が近いのを横目で確認する。

港ではモビルスーツが戦っているのが見てとれる。

つまり、ここも戦場なのだ。

改めて実感する。

眼前には避難船の停泊港が見える。

もうすぐだ。

もうすぐ港につく。

安堵が胸に去来する。

その時だった。

モビルスーツが飛来し、頭上をかすめてゆく。

みんなその場に蹲る。

俺を庇うように、父さんの腕が俺を包む。

なんとかやりすぎし、顔を上げるも、すぐ近くにミサイルが落とされる。

服飛ばされた木や土が宙を舞い、俺達は再びその場に蹲った。

マユが細い悲鳴を上げる声が聞こえる。

俺は、大丈夫だと言言葉をかけてことすらできず、父さんの胸に頭を寄せた。

攻撃と攻撃の一瞬の空白。

それを見計らって俺達は立ち上がり、駆け出す。

少しだけでも早く、その場から逃げだす為に。
俺の背後にビーム兵器の攻撃らしきものが落ち、辺りを橙色に染める。

2体のモビルスーツが激しく戦っているのを後ろ目で見た。
青い翼を持つモビルスーツがビームで攻撃し、それを緑のモビルスーツが避ける度に、辺りが橙色に染め上げられる。

「マユ！ 頑張って！！」
母さんがマユに声をかける。
マユの限界が近い。

一瞬、マユが足をよるめかせる。
激しく揺さぶられたマユの鞆から、お気に入りのピンクの携帯電話が零れ落ちる。

それに気づいたマユは振り返り、足を止めた。
「あ！ マユのケータイ！」
悲鳴のようにマユが叫ぶ。

見やれば、マユの携帯電話はそのまま山の斜面に沿い、転がってゆく。

「そんなのいいからあー！」
母さんが叫ぶ。

「いやあー！！」
マユが泣き叫ぶ。

止まってしまったみんなの足。
こんなことしてる場合じゃない。

先を急がなければ。
それでも足が止まってしまったのは、きっと、マユの心が限界を迎えていたからだろう。

不安と、恐怖が、携帯電話という日常の象徴の様なものを落とすことで一気に溢れ出てしまったのかもしれない。
そんなマユを、俺はなんとか元気づけたかった。
疲れた足を叱咤し、一気に山の斜面を下る。

途中、剥き出しになった土の斜面を滑り、携帯電話が引っ掛かった木の袂に止まる。

俺はしゃがみこみ、携帯電話へと手を伸ばし、掴む。

そして、運命の瞬間が訪れる。

爆音。

橙色に染まる世界。

激しい爆風が吹き荒れ、世界が抉り取られる。その爆風に煽られ、体が宙を舞う。

吹き飛ばされたのだと、気づいた時には既に、俺は地に伏していた。

色々と打ちつけたのか、体の節々が痛む。

悲鳴を上げる体を叱咤して、俺は身を起こす。

頭を振り、埃を払う。

なんとか立ち上がり、俺は振り返った。

大地は抉り取られ、木々は薙ぎ倒されている。

土埃が舞い、辺りが良く見えない。

ふらふらと、俺は抉られた大地へと近づく。

そこは先程まで俺が、家族がいた場所だった。

風が吹く。

砂埃が晴れてゆく。

辺りの様子が露わになってゆく。

ふらり、と一歩、俺は歩く。

最近お腹が出てきたと気にしていた父さん。
もう気にする必要はないだろう。
そのお腹は岩に潰され、潰れている。

ふらり、とまた一步、俺は歩く。

いつも身だしなみに気をつけていた母さん。
今日は婦人会の集まりがあるのだと、おめかししていた。
着ていた服は砕けた木や岩によってぼろぼろになっている。
そして、爆風に飛ばされた木の一部分がその胸を貫き、服を、大地
を赤く染めていた。

ふらり、とまた一步、俺は歩く。

はじめて買ってもらった携帯電話を大切にしていたマユ。
見当たらない。

きつと直撃を受けたのだ。

いつも携帯電話を持っていた腕だけが大地に転がっている。

頭上をモバイルスーツが掠めてゆく。

突風が身を揺らす。

ああ…

俺は嘆息した。

いっしょにいないと…

そう考えて俺は動き始める。

父さんを岩の下から引きずり出し、
母さんを串刺した木を引き抜き、

携帯電話を握りしめ、マユの腕を抱えて父さんと母さんの間に身を横たえる。

仰向けになり空を見上げる。

どこまでも蒼い空。

澄み渡った空。

その場所で、2体のモビルスーツが戦っている。

青い翼を持つモビルスーツが、優雅に天で舞い、下界の人間など知らぬと言わんばかりに、ビーム攻撃を乱射する。

緑のモビルスーツがそれを避ける。

避けられたビームはどこにいくのだろうと思うと同時に、近くでまた爆音があがる。

視界の端が橙色に染まる。

ああ、死神だ…

俺達は誤って、死神の通り道に踏み行ってしまったのだ。

穢れない空を優雅に舞い、無慈悲に、平等に、死を振り撒く美しい死神の通り道に。

あれは怖いものだと、頭では考えているのに。

俺の心はかつてない程の幸福感に包まれていた。

みんないっしょ。

父さんも、母さんも、マユも。

みんなと。

いっしょに眠れる。

なんて幸せな事だろう。

きつとあの死神は俺の上にもあの祝福の光を与えてくれる。

根拠のない自信と幸福感だけが、俺にはあった。

父さんと母さんの腕を引き寄せ、マユの腕を抱きしめる。
こんな幸福の中で時を止められる自分は、なんて幸せなのだろう
か。

今すぐにでも、時が止まってしまえば良いのに。

遠くに砲撃音が聞こえる。

まるで福音の様に。

体を満たす幸福感に身を委ね、俺は目を閉じた。

n e x t

S i d e ・ T 「 失楽園 」 (前書き)

グロテスク表現あり。
注意してください。

避難民を誘導しながら、トダカは空を見上げた。

近くでは2体のモビルスーツ フリーダムとカラミティが戦闘を行っている。オーブを守る為に戦うフリーダムに敬意を表す同時に、戦い続けるフリーダムの為にも自分の職務を全うしなければと心を引き締める。

避難船に乗る人々も大分少なくなってきた。この様子ならば、もう間もなく乗り込みも終わり、出港できるだろう。そう思い、トダカは山側を見上げた。

山は市街からの避難経路の一つだが、利用する者は少ない。一見すると最短ルートに見えるが、そこそこ標高があるため、山の外周部を大きく回り道した方が結局早く着くのだ。迂回ルートからの避難民の姿は見られない。この団体が最後だろう、そう思った瞬間だった。

山の木々の間を移動する色。

山道を走る人影。

トダカは思わず目を見開いた。まさか、と驚愕が体を貫く。

人影の頭上をカラミティが、フリーダムが、何度も掠め、その度に人影は立ち止る。

前身の血の気が引き、喉がからからに乾いてゆくのが分かる。ビームが何度も応酬する。

やめる。

カラミティがビームを放つ。

やめる。

フリーダムが避ける。

爆音。

やめる。

お返しと言わんばかりにフリーダムがビームを打ち返す。

やめる。

カラムティはフリーダムのビームを避ける。

そこにはまだ、私達オーブ軍が守るべき国民が…！

人影に落ちる光の暴力。

吹き飛ばされ、抉られた大地。

その場を目撃し、トダカの足は縫いつけられたかのように動くことができなかった。

もうもうと土煙があがるも、すぐさま空中で戦うフリーダムとカラムティによって払われる。露わになった抉れた山肌に、ようやくトダカは声を出した。

「山側からの避難民を視認！ 流れ弾が付近に到着！ 救助に行くぞ！ 急げ！！」

他の避難民の誘導に動いていた数人の部下がトダカの号令で動き始める。救助に向かう人員を集めながら、トダカは空を見上げた。

地上の惨劇を知らず、フリーダムとカラミティはまだ戦っていた。否、この惨劇を彼等が知るなど到底不可能な話だろう。それぞれが己の命を懸けて戦っているのだから。だが、このままでは現場に近づけないのも確かだった。

唐突に、フリーダムの動きが変わった。港から離れ、なんとかカラミティを避難船のない港 海上へと移動しようとしている。どうやら、港に近づきすぎていたことに気づいたらしい。それがもう少し早ければ、とトダカは思わずにはいらなかった。

「フリーダムが与えてくれた時間を逃すな！急げ！」

近づくにつれ、辺りの惨状が露わになる。

吹き飛ばされた木々。

抉られた大地。

向かうのは見た場所。

どうか、誰か、生きていて欲しいと一身に願いながらトダカは走る。

「!?!」

トダカは息を呑んだ。

酷く抉られた大地。

薙ぎ倒された木々。

フリーダムの砲撃が近かったのが災いしたのだろう。

走って来た途中に見たどの着場所よりも、人影がいた場所の状況は悪かった。

だが、トダカが息を呑んだのはその場所の状況にはなかった。

辺りに漂う肉の焦げた臭い。

所々赤黒い土。

大地をよくよく見れば、何か大きなものを引きずった血痕が土に残っている。

大岩の下からは伸びるものは臓物をその軌跡に遺して。

大量の血痕が付いた木のすぐ傍には、大きな血だまりから延びる軌跡があった。

そして。その軌跡の先には

腹部が潰れ下半身のない男性。

胸部に大穴があき、血に染まった女性。

男性と女性は奇妙にひしゃげた腕をその間にいるに少年へと伸ばしていた。

そう。

幼い子供のものであるう小さな腕を抱え、眠る少年へ。

異様な光景がそこにはあった。

特に少年は、酷く安らかで、幸せそうな微笑を湛えて目を閉じている。

肌の白さに死んでいるのかと思えたが、よくよく見れば少年は無傷だ。しかし、その手は真っ赤に染まっている。

背後で立ち竦む部下を尻目に、トダカは少年へと一步を踏み出す。

一步。

一步。

近づくにつれ、鮮明になる光景。

少年の胸が小さく上下しているのがトダカには見えた。それは生存者がいた喜びと同時に、少年自身が、この異様な光景を作り出したことをトダカに告げる。

カチカチと、奥歯が鳴る。

それを必死に抑える。

しゃがみこみ、男性と女性の腕を払うと、トダカは少年の肩に手を置いた。

「おい、おい。大丈夫か？」

肩を揺ると、少年は眉を顰め、ぎゅっと幼い子供の腕を抱きしめた。

まるで目覚めを拒むかのように。

トダカ自身、このまま少年を眠らせておいた方が良いのではないかという思いが胸を過ぎる。

しかし、そうはいかない。

この少年は生き残ったのだ。生き残ったのならば生きねばならない。どんなに辛くても。それが生き残った者の義務だ。

「起きなさい」

何度か強く声をかけてようやく、少年はゆるゆると目を開いた。

トダカと少年の目が合う。

少年の目を覗き、トダカは戦慄した。

そこには何もなかった。

悲しみも。

怒りも。

絶望も。

光すらも。

虚ろな紅い瞳はガラス玉のようにトダカを映し、静かに瞬く。その幼い顔には一切の表情はない。

先程まで、幸せそうな微笑を浮かべて眠っていた少年と同一人物

とは到底思えない。

呆気取られるトダカを気にすることなく、少年は言葉を紡いだ。

「じじがてんじく？」

後に、トダカはこの時の事を何度も思い出し、自問自答することになる。

生き残ったのならばどんなに辛くても生きねばならない。それが義務だ。そう考え、少年をこの世へと引き戻したことは果たして正しかったのか。

異様な光景の中にあつた少年はあの時、確かに、余人が及びもつかない樂園にいたのだ。そして自分はその樂園を壊した。誰に、少年に、了承も取ることなく。

迫るモバイルスーツ。

艦に突き立てられる斬艦刀。

自身の死の間際。

沢山の大切な顔が通り過ぎた最期。

トダカの脳裏に浮かんだのは、樂園を失った少年の虚ろな眼差しだった。

quid faciam? quo eam?

一体私は何をしたらよいのか？ 一体私はどこへ行けばよいのか？

？

？

夢を見ていた。

とても幸せな夢を。

パチリ、と俺は目を開いた。

まるで機械の電源が入ったかのような明瞭な目覚めだった。
身を起こせば、簡素な部屋が目に入る。

オープで家族を失ってから半年。今、俺ははプラント P.L.
A.N.T.: Productive Location All
yon Nexus Technology (科学技術に立脚
した民族解放国家) にいる。

日本に帰るという選択しもあったけれど、それは選ばなかった。
幼馴染と交わした大切な約束を破ってしまったのだ。合わせる顔が
なかった。だから、俺はプラントに来る事を選んだのだ。

現在俺が住んでいる部屋は、オープなどの地上からの移民に、プ
ラントでの常識や法などを教えるディセンベル生活教練校に付属し
ている寮の一室である。大抵は2〜4人部屋らしいのだが、運よく
一人部屋が余っていたらしく、諸々の事情を考慮され、俺は一人部
屋で過ごす事になった。

つらつらと、此処に来るまでの経緯やオープで出会った人たちの
事を思い返す。けれど、今は起床しなければならぬ。予定は山の
様に詰まっているのだから。

俺はベットから出て、キッチンのコーヒーマーカーに豆と水をセ
ットし、スィッチを入れる。そのまま洗面所に赴き、洗顔、歯磨き
を終えると、クローゼットから着換えを適当に引っ張り出す。服の

ボタンを留めながら、俺は今日行わなければならない事を思い返した。

AM 6 : 0 0 起床
AM 7 : 4 5 デイセンベル生活教練校 登校
AM 8 : 0 0 教練校のカフェにて朝食
AM 9 : 0 0 午前講義開始
PM 1 2 : 1 0 昼食
PM 1 3 : 0 0 午後講義開始
PM 1 6 : 1 0 講義終了 自由時間開始
PM 1 9 : 0 0 夕食
PM 2 1 : 0 0 消灯

自由時間は図書館にて読書。

今日のカリキュラムを反芻しながら、手早く支度を整える。鞆をテーブルの上に置くと、その傍に置いてある時計で時間を確認する。

AM 0 6 : 3 1

登校の時間までまだ時間がある。

カーテンを開け、外の光を部屋の中に取り入れる。光、といっても人工の光である。明け方を示す光量が、俺の眼をさす。その眩さに一瞬目を細めると、窓から見える風景を眺めた。しかし、目を覚ましたばかりの町に人影は少なく、ジョギングに励む人の姿がちらほらと見える程度である。

穏やかで、ありふれた光景だった。とても戦時中とは思えない長閑さである。

眼下に広がるその光景を見ながら、俺は本棚から本を抜き出した。帯出期限が今日までの本である。

出来れば読んでしまいたい。

あと少しで読み終わるその本に挟んだ栞に手をやり、ページを開

の学校に通う事になった経緯を思いだす。

プラントに移住の申請をしたからといって、すぐに受理される訳ではない。普通の国と同じく色々な検査があつて初めて、入国及び滞在が許される。

それに、移住の申請が受理されてもすぐに普通に生活を始められるかと言うとそうではないのだ。念入りに有害な細菌やウイルスを持ち込んでいないかなどを調べる検疫や、身体の状況は勿論、運動、知能、俺の場合は精神まで検診など、様々な工程をクリアし、ようやく移住の許可が出るのだ。

といつても、俺は既にオーブで済ませられるものは済ませており、プラント本国の検疫で1日を潰した後はあっさりに入国する事ができた。

その後すぐに、俺はプラントに住む為に必要な知識を得るべく、プラントでも初等教育全般を担うデイセンベル市にあるデイセンベル生活教練校に入校した。

本来、デイセンベル生活教練校への入校は、移民に義務付けられるものではなく任意によるものだ。大抵の移民がプラントで生活するにあたって必要な知識などを1週間程度の講習で学んだ後、プラントの各市に散らばっていく。

俺が入校したのは、保護者もおらず、コーディネイターとしても未成年という立場であつたためだ。どうやらトダカさん達が俺が生きやすい様にと色々気をまわしてくれたらしい。最長である3カ月のコースを受講する事になっていた。

入校してから早1カ月。ようやく寮での生活にも慣れた。

俺は地上で勉強があまり好きではなかったが、プラントに来てからは自分でも信じられない位、勉強漬けの毎日を送りついている。それが全く苦ではないのだから不思議だ。

それに、最近では面白い遊びも覚えた。

デイセンベル生活教練校のカリキュラムは多岐に渡るが、その中

には勿論、俺が地上で学習済みなものもある。

歴史なんかがその最たる例だ。基本的にプラントの設立経緯などがメインのだが、歴史書は複数読めなんて中学校の先生が言っただけその理由が何となくわかった。書き手の視点、見方の視点が変わればこんなにも同じ出来事でも違う様に見えるのだと思ひ知らされた。笑えるぐらいに食い違う。その差異を見つけるのが俺の遊びになっていた。

あとは宇宙空間に居を構えるプラントならではの、シエルターや酸素ボンベのある位置など防災に関する講義や、独自の生活様式ルール、マナー、法律などを学ぶ為の講義など、学習事項は多岐に渡った。宇宙空間に放り出されてしまった時のための無重力空間訓練なんてのもあった。

カリキュラムは詰められるだけ詰めておきたかったので、本来なら自由選択領域になる航空力学やらプログラミングなんてのもとっておいた。

とりあえず、講義を受けている間は何も考えなくてすむ。早く講義が始まればいいと思ひながら、俺は目を閉じた。

集中していれば時間はあっという間に経つもので、気がつけば全ての講義が終わっていた。俺は帰り仕度をすると、図書館に向かうべく学校を後にした。

紅葉する並木道。

落ち葉を踏みしめる。

マユは春より秋の方が好きだったなと思ひだしてしまふ。一足先

に日本に帰ってじいちゃん達とフシミで紅葉狩りにいそしんでいることだろう。稲荷の近くに美味しいお茶屋さんがあったから、そこでお菓子でも食べてるはずだ。腕だけでも、ちゃんと帰ったのだからきつとそうだ。いいな、あそこのお茶美味しくて好きなのに。お菓子が来るまでの時間、拾った綺麗な紅葉を見せてくれて、特に綺麗なのを差し出し俺に言うのだ。

《マユのだけど、お兄ちゃんの目の色に似てるからあげる！》

きつと、この紅葉が行けないのだ。完全に天候が管理できるはずなのに、なぜ、プラントは四季の再現などという無駄な努力をしているのだろうか。ずっと過ごしやすい環境にしておけばいいじゃないか。

收拾がつかなくなった思考を放棄すべく、俺は図書館への道を全速力で走り抜けた。

図書館に着くと、俺は一息つき、扉を押して中に入った。閉館までまだ時間はあるものの、紙製の本は早く返してしまいたい。

プラントでは紙製の書籍は珍しい。

限られたスペースしかないプラントでは、紙製の本を置く為に割くスペースすら惜しいのだ。故に、電子書籍が全体の殆どを占め、ただでさえ貴重な紙製の書籍は、更に稀少となっている。そのため、図書館での貸し出しはかなり厳重で、期限までに必ず返さなければかなりの期間の貸出禁止の措置が取られる。度重なれば、図書館そのものの利用が禁止されてしまう。

それだけは絶対に避けなければと、俺は返却手続きを急いだ。

返却手続きをとりながら、俺は次に借りる本を考える。

プラントの図書館は、遺伝子学やら工学やらの研究所やそれに関連する書籍が多い。俺がよく読む文学や哲学といった本は大抵電子書籍になっており、あっても極僅かである。

電子書籍はデバイスまで貸してくれるのだが、壊してしまう可能性もあるので、紙の本を探してはそれを借りて読んでいる。

返却手続きが終わるとすぐに、書籍検索端末に向かい、手当たりしだい紙製の本を検索する。目ぼしいものをいくつか見つけると、俺は書籍情報を印刷してカウンターへと向かった。

図書館での時間はあっという間にすぎてしまう。気がつけば、そろそろ帰る時間になっていた。読んでいた電子書籍のデバイスをオフにすると、立ち上がり、俺は図書館を後にした。

放課後や仕事帰りの時間帯。並木道にはそこそこの人影がある。そして聞こえてくる歌声。

今日も歌っているのか、と俺は歌声が聞こえてくる方へと目をやる。

長い黒髪を持った少女が、ギターを抱えて歌を歌っていた。

ストリートミュージシャンだ。

数日前から、この黒髪の少女はこの図書館がある並木道で歌を歌うようになっていた。少女の歌は、曲も詩も良いのに、誰一人足を止めて聞こうとはしない。

ストリートミュージシャンってこんなものだったかな、と俺は不思議に思う。少なくとも、地上で見かけたストリートミュージシャンの周りには、もう少し人がいた気がした。

見た人が良かったからなのだろうか。

俺は時計を見る。

17:23 p.m

よし、まだ時間はある。

俺は少女の斜め前にあるベンチに向かうと、落ち葉を払い、そこに腰かける。

鞆から本を取り出すと、少女の歌を聴きながら、文章の世界へと飛び込んだ。

気がつけば、少女の歌は止まっていた。

帰り仕度をしている。

俺も本を閉じ、鞆に戻すと立ち上がり寮への道を急いだ。

n e x t

友情論 ?

約束・源

俺には幼馴染がいる。

家が隣同士で、親同士も仲の良い”オトナリサン”って奴だ。

赤ん坊の頃からの知り合いで、同じベビーベットに寝転がされては、よくじゃれ合っていたらしい。主に、俺がちょっかいだして泣かせるという形だが。

竹馬の友の名前はシン・アスカ。俺の弟分である。生まれは俺の方が遅いんだけど。

シンが俺の弟分だっというのにはきちんとした理由がある。

あいつは小さい頃は病弱で、家から一歩も外に出れない生活をしてきた。なんでも、極力、太陽の光を浴びない生活をしなければならなかったらしい。そのせいか、あいつはいつも独りで家の中にいた。

そんな状況を俺の親が放っておくはずもなく、俺とシンはいつも一緒に遊んでいた、…らしい。

今となつては、その頃はもう遠い昔の話になっている。

俺が覚えている記憶の中のシンはもう、太陽の下で一緒に遊んでいた。

今まで外で遊べなかったこともあってか、細くよわっちかったシンは、これまでの運動不足を取り返すかのように、毎日一緒に泥だらけになるまで俺と遊び回った。少し大きくなると体力をつけるべく、俺と一緒に剣道やら柔道やらの道場に通うようになっていた。

それでもシンのよわっちは相変わらずで、稽古のない日には本を読んでいる姿を見かけた。

更に暫くすると、シンの妹のマユちゃんも俺達の後ろについてくるようになった。

マユちゃんはシンとは正反対の活発な子で、俺とシンはいつも彼女に振りまわされていた。

家族ぐるみの付き合いもあって、俺達はよく一緒に旅行に出かけた。

春にはヨシノで花見。

夏には一緒に海水浴。

秋にはフシミで紅葉狩り。

冬にはナガノでスキー。

色々な所へ行っていた。

学校だって俺とシンはいつも同じクラスだった。

俺とシンは時には競い、時には協力しながら、遊びに、悪戯に、勉強にと励んだ。

これからも、ずっと、そんな日々が続くのだと、信じて疑わなかった。

目まぐるしく世界は変わってゆく。

俺達子供の預かり知らぬ所で。

いつのことだっただろうか。

宇宙にいるコーディネイターがニュートロンジャマ をばら撒いた後だった気がする。

テレビが見れなくなって、ゲームで独占できるようになったと喜んだのも束の間、学校でよくシンが嫌がらせを受けるようになった。いじめっ子達の言い分も訳が分からないもので、シンがコーディネイターだからだという。コーディネイターは悪い奴で、シンが空に上がって悪い奴になる前にやっつけるのだと、要領を得ない理由だった。

どうやら親に訳が分からない事を吹き込まれたらしい。シンは俯いてしまい、何も言い返していなかった。だからかわりに、せいづらは俺がとっちめてやったが。

日増しにシンへの嫌がらせはエスカレートしていく。昨日まで仲良くしていた友達がそれに加担していると気付いた時は愕然とした。なんでも、ニュートロンジャマー投下の影響で、父親が失業したらしい。

そして嫌がらせの手がシンを庇い続ける俺の方へ伸び出した時、シンは言った。

「引越す事になったんだ」

オーブに。

俺はショックで思わず言ってしまった。

「俺がシンを守れなかったから引越すのか？」

そうとしか考えられなかった。

親同士の仲が良く、ずっと一緒に育ってきた俺は知っている。どうしてシンが、いや、シンの家族がコーディネイトを受けて生まれできたのか。

生きるためだ。

何の枷もなく、他人から冷たい目で見られることなく、胸を張って、生きたいように生きるためだ。

そう、俺に教えてくれたのは、シンのじいちゃん シンのとうちゃん のとうちゃん だった。

シンのじいちゃんは、酒好きで、桜が好きで、俺達が住む日本自治区という場所が大好きで、いつもからからと豪快に笑って俺達に構ってくる面白いじいちゃんだった。

俺はシンのじいちゃんが大好きだった。勿論、シンもだ。あいつが一番のおじいちゃんっ子だった。

普段はとても明るい人だったからこそだろうか。記憶に焼きついて離れないのは、シンのじいちゃんが病気の定期検査のために病院へ向かうバスに乗る、その小さな後ろ姿だった。

重い病気を抱えて生きてきたシンのじいちゃん。

暑い夏のある日、縁側でスイカを食べる俺達の横で、こんなことを言っていた。

”わしがこうして長生きできとるのは、科学と医療技術の進歩のおかげじゃ”

”息子や嫁、孫達が忌まわしい病気から解放されたのも、科学の進歩の賜物じゃ”

”今、世間は色々いっとるが、わしは息子を孫を、コーディネイトした事を恥じてはおらん。”

シンのじいちゃんが死んだのが秋だから、その直前の夏だった気がする。

”どうか、ずっと、シンの友達でいてやってくれよ”

男と男の約束だ。

シンのじいちゃんとは、他愛のない約束なら沢山交わしたけど、真剣な大人との、大人の約束ははじめてだった。

だから守りたかった。

約束も、親友も。

いや、約束なんてなくなっただって俺はシンを守りたかった。

ずっと一緒に育ってきた幼馴染、唯一無二の親友なのだから。

「俺がもつと強かったら…」

その言葉に、シンは笑いながら首を横に振って否定した。充分だったと。

何があっても傍にいてくれて、庇ってくれて嬉しかった、と。

今度は自分が俺を守りたいから、オーブに行くのだ、と。

そうシンは言った。

そう笑ってシンは手を俺に差し出した。

ありがとう

白くて細い手。

長袖の下に、沢山の傷があることを俺は知っている。
守りたかった。

大切な幼馴染を。

ずっとずっと。

でも、その為の力は今の俺にはなく、俺はただ、シンの手を握り返すことしかできない。

だから、俺は、俺ができることをする。

日本からいなくなるシンの為にできること。

それは

「守ってるよ、ずっと、ずっと。お前の家を、アスカのじいちゃん
の墓を。みんな守って、待っててやる。だから」

お前はお前の家族を守ることだけ考えとけよ。

いってらっしゃい。

絶対に帰って来いよ。

俺はここで待ってるから。

そう言って、俺はシンと繋いだ手を離した。

a m i c u s c e r t u s i n r e i n c e r t a c
e r n i t u r .

確かな友は、不確かな状況で見分けられる。

キケロ 『友情論』 より

？（前書き）

作中で取り扱われている病の症状、描写は全て架空のものです。

現実には存在しません。

また、類似のものが実在したとしても、それに対する一切の他意は
ございません。

?

?

あのストリートミュージシャンの歌を聞いてから早1カ月。今日も俺は図書館帰りに歌を聴きながら読書をしていた。

あれからほぼ毎日、ストリートミュージシャンの少女は、同じ時間同じ場所で歌っていた。その度になんとなく足を止めて読書をしていたら、そのまま俺の習慣になってしまったのだ。

今日も少女は歌っている。

ギターで奏でる旋律と共に紡がれる切ない歌声。降る雪の様に静かに、そつと心に寄り添う様かのように優しく。歌声は鎮魂歌を紡ぐ。

時期が時期だからだろう。

プラント政府が地球連合に停戦を申し込んでからもうすぐ3カ月が経つ。2月のコペルニクスの悲劇を皮切りに始まった今回の戦争は、9月末のヤキン・ドゥーエの戦いを経て終結した。

停戦から早3カ月。そろそろ戦場となった場所付近での生存者捜索も打ち切られる時期だ。

生きて帰ってこれた人、死んで帰って来た人、帰ることすらできずに鉄の棺桶の中で真空の宇宙を漂い続けることになった人。

少女は歌う。

傷ついた人の心に寄り添い、帰らぬ人の安寧を祈る歌を。年の変わり目は人々にある種の区切りを齎すだろう。

3カ月

そう、もう3カ月も経つのだ。

俺がプラントに来てから。

正確には2カ月と少し。

俺は停戦の少し後にプラントに渡たり、10月の中頃にディセンベル生活教練校に入校した。年が明ければ俺はディセンベル生活教練校を修了し、就職活動を開始しなければならぬ。

一定の期間、ディセンベル生活教練校の寮に住まい、プラント政府からの生活保護を受ける事ができるものの、その間に生計を建てる為にプラントでの職を探さなければならぬ。

それもまた当然のことなのだ。

大人になるのだから。

なぜならば、プラントの成人年齢は15歳。

数え年で年齢を計算するプラントだと、俺ももうすぐ15歳になる。日本の成人は20歳だったのでいまいち実感がない。

実感がないものの、現実には眼前にあり、逃れる事はできない。

俺を庇護してくれる存在はもういない。

就職活動、成人

まだまだ先だと思っていたことが一気に押し寄せてくる。

去年の今頃なら、そんなこと、想像もしていなかっただろう。

クリスマスだ！サンタさんが来る！とはしゃぐマユを宥めながら、俺自身もプレゼントに何を買ってもらうか悩んでいた様な気がする。幼馴染と結託して、互いに欲しいものを打合せ実質2本のゲームを手に入れる、という従来の方法が使えなくなつたから、如何にマユを誘導するか色々考えていたはずだ。

今思えば、とても幸せで贅沢な悩みだったのだと思う。

思考を手元の本に戻した。

《神は死んだ》

本の中ではそんな言葉が躍っていた。

神などとうの昔に死んでいる。

思わずそう本に反論していた。

はあ、と溜め息を吐き、本を読み進める。

持ち出せる紙製の本も大分少なくなり、兎に角ページ数と難しそ

うだという理由でこの本を借りたのだが、全く理解出来ない。それにも拘らず、不思議と読み進めてしまふのは何故だろうか。

データが正しければ、この本は再構築戦争より更に前、少なくとも五百年以上前に書かれた本の筈だ。

しかし、何故か目が離せない。どうして、この本の作者はこんな言葉を文字にして残す程の境地に至ったのだろうか。その背景は、理由は、一体何なのだろうか。読み進めればそれが分かるのだろうか。

ページをめくる。

ページをめくる。

ページを

？

俺は歌が止まった事に気づいた。

もうそんな時間が、と顔を上げる。

「!?!」

思わず目を瞠った。目の前には人の顔。硬直する俺を見て、その人物は小首を傾げ、俺から離れる。

「ねえ、アナタ。いつも私の歌を聞いてくれてる人、ですよね？」
かけられた言葉に俺は数回瞬くと、よくよく目の前にいる人物を

観察した。

そこにいたのはいつもこの場所で歌を歌っているストリートミュージシャンの少女だった。

「え？ あ、うん」

取り敢えず頷き、肯定しておく。俺の反応を見て、少女は嬉しそうに笑った。

「やっぱり！ いつも私の歌を聞いてくれてありがとう！ 私はミア！ ミーア・キャンベル！ 歌手の卵よ！ あなたは？」
ずいっと再び顔を覗きこまれ、俺はしどろもどろに應える。

「シン…シン・アスカ。デイセンベル生活教練校の生徒だ」

俺の言葉の何が琴線に触れたのかは分からないが、少女 ミーアは目を輝かせて捲し立ててきた。

「生活教練校ってことは、あなた、地上から来た人よね！？ ねえ、地上にはどんな歌があるの？ どんな歌手がいて、何のジャンルの人気があるの？ 何か歌を知っていたら教えてくれない？ 私、もつというんな歌を知って勉強したいの！ あ！ とところで、私の歌どうかな？ 上手い？ 下手？ よく聞いていてくれるから気になって」

矢継ぎ早に繰り出される質問の数々に、俺は硬直する。すると、俺の反応をどうとつたのか、ミアはすまなさそうに眉を下げた。

「…ごめんなさい。私、地上から来た人と話すの初めてで、つい…」

そう肩を落とすミアを安心させるように、俺は言った。

「気にしないで。ちょっと驚いただけだから。えーと…うん。君の歌、だっけ？」

俺はミアが一番気にしているだろう質問を拾ってみる。

どうやら当たったっていらしく、ミアはうんうんと頷いた。

その素直で直情的な様子に俺は笑みを零す。

「いい歌だと思うよ。癒し…とはちょっと違うな…そっと寄り添って傍にいてくれる感じがする。俺は好きだよ」

ここ1カ月ミアの歌を聴き続けた感想を述べる。
きちんとレッスンを積み、更に努力しているのだろう。ミアが
歌う歌のジャンルは幅広く、そのどの歌も高い実力に裏打ちされた
ものだった。自作であろう曲もなかなか良く、聞いていて安らぐ曲
や元気づけられるような曲が多かった。

「聴いていて、心が落ち着く」

俺は素直に抱いた感想を言った。

少なくとも、悪い感想ではないはずなのに、俺が言葉を重ねる度
にミアの表情が暗くなっていく。肩を落とし、ふてくされたよう
にミアは言った。

「そんな顔で褒められたって嬉しくないわ」

唇を尖らせ、ミアは怒っているのか腕を組む。

「そんな顔？」

ミアの言葉に俺は首を傾げる。

一応、俺は自分で言うのもなんだが、少し微笑みながら言ったつ
もりだった。小馬鹿にしたように見えたのだろうか？

「無表情よ。さっきから眉一つ動かさないし。淡々と褒められても
嬉しくないわ」

「ああ……」

そのことが、と得心した。プラントに来てから他人と深く関わる
事が殆どなかったために、すっかり失念していた。

「俺、病氣らしいんだ」

ミアが驚いた様に目を丸める。

その思い描いた通りのリアクションに俺は苦笑した。

「心のなんだけどね」

言葉と共に浮かべたつもりの微笑を、果たして俺の顔は形作って
いるだろうか。

オーブ軍に保護された後、避難船に乗せられ、俺は戦場となったオノゴロ島を離れた。

人でごった返す避難船の中を、俺はぼんやりと眺めていたような気がする。

トダカさんに声をかけられ、こちらに引き戻された後の事は、正直、よく覚えていない。ただ目の前の光景を瞳に映していただけのような気がする。

誘導されるままに歩き、促されるままに乗船し、人波に乗せられ下船した。

多分、トダカさんが気にかけてくれていなければ、俺はあのまま野垂れ死んでた気がする。

戦闘が一段落した後、トダカさんに促され病院で診察を受け、色々な人に会った後に出された俺に対する結論はこうだった。

【諸々の身体機能に異常なし。ただし、精神的なショックのせいで表情を失っている】

表情筋に異常がないにも関わらず、どうやら俺は、笑ったり怒ったりといった表情を顔が作る事ができていないらしい。

家族を目の前で失った大きな感情の負荷を、心が処理しきれず、一定以上の感情を認識しない様にしている。しかも、認識のラインが著しく低い。枷がかけられた心の不安定さが、表情の欠落となって現れたのではないか。

そんな見解を示された。

特に感慨も抱かず、俺はその結果を受け入れた。

そう診断されたからにはそうなのだろう。俺は普通に笑ったり怒ったりしているつもりなのだけ。

そう言えば、余計に質が悪いと言われた。

でも、心を病んだ人間は俺だけだったわけじゃない。あの戦闘に巻き込まれ、家族を、友人を、失った人は沢山いて、心を病んだ人

はその数だけいた。

病院にはそんな人がたくさん来ていた。

俺よりも大人なのに子供の様になってしまっていた人。俺と同じように表情を失っていた子供。聞こえない筈の砲撃音に怯え、唐突にパニックを起こす人。

俺なんて軽度な方だと思う。

よくある戦争がもたらす悲劇の一つ。表情をなくした程度がなんだというのだろう。父さんや母さん、マユは命を亡くしている。

《何も君だけが特別という訳ではない。よくある話しさ。》

そう俺に向かって言ったのは誰だったか。

避難施設の片隅。診察も終わり、日々をぼんやりとすごすだけだった俺に対し、その人は吐き捨てるように言った。

《そこでそうしてるのも君の勝手だろうけど、せつかく拾った命なんだから少しは足掻いてみたらどうだい？ 今の君も、吐き気がする位に鬱陶しいよ》

果たしてその言葉は、俺に投げかけられた言葉だったのだろうか。今となっては、その真意を問う事は出来ない。

ただ、ぼんやりとした日々の中、その言葉だけが異様な色彩を放って俺の中に刻み込まれている。

よくある話し。

そう。

よくある話なのだ。

何もかもが。

「地上で、家族が、ね……」

一瞬の回想の後、そう言えばミアは目に見えて慌てて、表情を暗くした。濁した言葉の意味がわかったのだろう。

かける言葉を探すミアを、宥める様に俺は言った。

「よくある話さ。俺自身、さして不便に感じてないし、気にしてない」

だからミアも気にしないで欲しい。そう言外に行ってみたものの、やっぱりミアは気にしたらしい。

「ごめんなさい……その、つらいこと、思い出させちゃって……」

「いいよ。さつきも言ったけど、俺は気にしてないし。ところで、ミアの歌だけだ」

謝ってくるミアの言葉を遮り、強引に俺は話を転換する。ここまですれば、きっと乗ってくれるはずだ。

「え……？ ええ、そうね。感想、もう一度聞かせてくれない？」

今度はミアも気付いてくれたらしい。俺が話を変えたがっていることを。だから俺も会話を続ける。

「俺はミアの歌が好きだよ。なんていうのかな……こう……寄り添ってくれてる感じがする。心を癒すとかじゃなくて、ただ、傍にいてくれる感じ。……曖昧でごめん」

随分と抽象的な感想になってしまった。でも、それがミアの歌から感じた事だった。

俺の感想に、ミアは嬉しそうに笑った。

「本当！？ 嬉しいわ！ 私も人の心に寄り添いたいなって思いながら歌ってるの！ きちんと伝わってるのね！ 私の想い！ ……私程度だと、ラクス様のような人の心を癒す歌なんて歌えないからせめて寄り添いたいって思ってる……」

最初は嬉しそうにしていたのに、最後は何故か沈んだ様に、ミアは肩を落とした。その原因は恐らく、俺の知らない名前のせいだろう。

「ラクス様？」

聞いた事のない名前だった。その人物は有名人なのだろうか？

「え！？ 貴方、ラクス様を知らないの!？」

ミーアの反応からして余程の有名人なのだろう。

俺が頷くと、ミーアは少し思案気にしてから首を横に振った。

「そう…」

ミーアは少し俯いた。

「？」

俺は首を傾げた。どうかしたのだろうか。

「ミーア？」

名前を呼んでみる。”ラクス様”を知らない事がそんなにシヨックだったのだろうか。

ぱっ、っとミーアは顔を上げる。

「!」

俺が驚いているのを尻目に、ミーアは振り返り自分の荷物が置いてある所に駆け寄ると、鞆の中身を漁る。そして何かを取り出すと、走って俺の所に戻り、あるモノを俺に差し出した。

「はい！ コレ、あげるわ！」

差し出されたのは3枚のディスクだった。

唐突な展開に固まる俺に、ミーアは晴れやかに笑った。

「私の歌が入ったディスク！ 実用、保存用、布教用の3枚あげるから、しっかり宣伝してね！」

そう言ったものの、なにか思う所があるのか、ミーアは不安げにしている。

ふと、俺はある事を疑問に思い、ミーアに尋ねた。

「それを受け取ったら、ミーアはもうここでは歌わないのか？」

それなら困る。ディスクでいつでもミーアの歌を聴けるようになるのもいいだろうけど、やっぱり直接聴いた方が良いに決まってる。そう言ったのが意外だったのか、ミーアは目を丸めた。

「直接、もっと聴きたいの？私の歌」

ディスクを受け取りながら、俺はミーアの言葉を肯定する。

「ああ」

ミアは嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑った。

「歌うね。ここで…もとから、もう暫くいるつもりだったし」
「ふわりと下がった目尻。」

浮かんだ優しい笑顔が、昔に山で見た霞草に似ていると思った。

n e x t

Side・M 「降誕祭」

《風の囁り。

緑の囁き。

海の歌声。

空が、大地が歌う賛歌。

貴女に聞かせたかった。

貴女と聞きたかった。

残念ね。

それももう無理みたい。

《ごめんなさいね…》

「はあ…」

大きく吐いてしまった溜め息に、私は慌てて周囲を見回した。

図書館へと続く並木道は本来、そこそこ人通りのある場所なはずなのに、今日は人通りが少ない。

「いても誰も私を気にしない、か…」

思わず呟いてしまった言葉に、私は眉を顰めた。首を横に振り、暗い思考を追いやるとギターを構え直す。

今度は明るめの元気がでる歌を歌おう。そう思って私はギターを爪弾いた。

私がこうして道端で歌うようになってからもうすぐ一年と3ヵ月

になる。けれど、道行く人々は誰も私の歌に足をとめない。私がここで歌っている事に気づかない。それでも誰かに私の歌を聴いて欲しくて、私は歌を紡ぐ。誰かの心に寄り添いたいと願いながら。

私に《歌うこと》を教えてくれたのは”母さん”だった。”母さん”が良い声だと褒めてくれて、”母さん”が喜んでくれたから私は歌を歌っていた。

レッスンに通い、歌の歌い方を学び、曲の作り方を学び、作詞の仕方を学び、歌に、音楽に関わる事はどんなことでも勉強した。けれど、どんな講師の先生よりも沢山のことを私の”母さん”は教えてくれた。

あたたかく迎えてくれる家。

優しく抱きしめてくれる腕。

頭を撫でてくれる手。

慈しみに声。

誰かと食事をする喜び。

誰かを想つての怒り。

誰かの為に涙する哀しみ。

誰かとおしゃべりする楽しさ。

花の囁き。

鳥の囀り。

風の歌声。

月の眼差し。

美しい世界への憂鬱。

地上への憧憬。

終わりなき探究への恐れ。

輝く日々の幸福。

”母さん”は私に、”世界”の素晴らしさを教えてくれた。

大好きな”母さん”を亡くし、私は、私が歌う意味を失った。

私は歌を歌えなくなった。

”母さん”も歌も一度になくし、失意と惰性の中で私は日々を生きていた。そんな私の耳に響いたのがラクス様の歌声だった。

ラクス様

ラクス・クライン。

プラント最高評議長の娘。

プラント国民が慕う歌姫。

私の尊敬する歌い手。

奇しくも、ユニウスセブンが核攻撃された”血のバレンタイン”事件の直後、多くに人々が唐突な喪失の痛みと失意に呑みこまれていた時期だった。ラクス様の歌声はその多くの人々の心に響き、癒しを与えた。私の痛みと、彼等の痛みは違うけれど、確かに私はラクス様に救われた。

多くの人々の心を癒し、平和を祈り続けるラクス様。

歌で人を癒し、人を救うラクス様は、私の理想の歌手が具現化したような存在だった。

私もラクス様の様になりたい。

ラクス様の様に、歌で痛みを苦しむ人々を癒したい、救いたい。

私の歌で……！！

家のピアノを前に、私はひたすら弾き、歌った。

久しく思いだせなかった、”母さん”の優しい微笑を傍に感じな

がら。

アルバイトをしながらだけれど、レッスンに戻り、私は沢山のオーディションを受け始めた。

時には、事務所にデモディスクを送ったりもした。いくつかの事務所で色よい返事を貰えたこともあった。けれど、私の容姿を見るなり眉を顰め、首を横に振った。

『どんなに歌声がよくとも、見栄えがしなければ歌手としてデビューするのは難しい』

整ってもいなければ、醜くもない。私の平凡な容姿は、どこまで私の人生に影を落とすのだろう。この容姿のせいで何度も私は選ばれない。

それでも私は諦めなかった。

少しでも私の歌を聴いてもらいたくて、少しでも私の歌で誰かが癒されることを願って、私はギターを片手に町へ出た。

そして気付いてしまった。

気付かされてしまった。

私の声はラクス様に似てる

はじめはもつと人通りが多い所で歌っていた。同じように歌手を目指し、道端で歌う人達と肩を並べ、張り合いながら。

私の歌に足を止めてくれる人がいた時は本当に嬉しかった。はじめての私のお客さんの為に、私は心を込めて歌を歌った。

歌いきった後、そのお客さんが私に近づいて来た時は本当にドキドキした。

感想を言ってくれるのかな？それともスカウト？

何もかもがスローに見えて、期待に胸を高鳴らせながら、私はお

客さんが口を開くの待った。

『もしかして、ラクス・クライン様ですか？』

心が冷や水を浴びせられたかのように冷え切った。上手く笑えていたか自信はない。

最初の頃はラクス様と同じだと言われて嬉しかった。けれど、何度も、何度も、何度も、同じ事を言われ、しまいには私の歌を遮り、わざわざ声をかけてくる人も出てきた。

『ラクス様の歌を歌ってくれませんか』、と。

容姿は似ても似つかないけれど、声が似ているから聞いてみたい。本物には会えないから、せめて似ている人の歌を。そう願う人々の想いを私は無下にすることはできなかつた。

ラクス様の歌を何度も歌った。

ラクス様の歌しか歌っていない日が何度も続く様になった。

私の歌声で誰かが喜んでくれるならそれでいい。

私の歌声を聞いてもらえるだけ幸せ。

そう何度も自分に言い聞かせた。

けれど、気づけば私はここにいた。この、人通りが多くもなければ少なくともない、図書館前の並木道に。

ベンチに座り、私の歌を紡ぐ。

誰かの癒しになれなくてもいい。誰かの救いになれなくてもいい。ただ、傷ついた人の心に寄り添いたい。寄り添わせて欲しい。

私の歌を……！！

そう願いながら歌を紡ぐ。

ふと顔を動かせば、反対側のベンチの端で、男の子が本を読んで

いた。近くには図書館があるのできつとその帰りなのだろう。

珍しい紙媒体の本を手に持っている。

読書の邪魔にならない様に、私は曲調を変える。

男の子が心地良い時間を過ごせるようにと願いながら。

あれから頻繁に男の子の姿を見るようになった。

私が歌っている時間を見計らっているのかいないのか。男の子は毎日、同じ時間帯、同じ場所で本を読んでいた。

もしかして私の歌を聴きにきてくれていたのだろうか？そうだと嬉しい。けれど期待してはダメだ。そう自分に言い聞かせる。

男の子はとても特徴的な容姿をしていた。

私よりも深い黒の髪に、血の様に真っ赤な瞳、雪の様に白い肌、嫌みのない程度に整った容姿は恐らくコーディネートを受けているのだろう。少し羨ましかった。

けれど、男の子を 彼を深く印象付けるのは雰囲気だろう。容姿そのものは子供っぽさが残っているにも関わらず、纏う雰囲気や表情は大人びていた。

どこか危うく、儚く見えるのに、確かな存在感。虚ろにも見える紅い瞳が、存在のアンバランスさに拍車をかけている。

今日は白いニットの帽子を被っている。頭の上ののったぼんぼんがかわいらしくて、映像で見たウサギを彷彿させた。

微笑ましくて思わず私は笑みを零す。

彼のおかげで、私は随分と私の歌を取り戻せた気がする。鬱々としていた気分はこんなにも晴れやかで、心はとても凪いでいた。

ラクス様が活躍されたヤキン・ドゥーエの戦いから3カ月が立と

うとしている。

あの戦いで大切な人を亡くし、かつての私のように失意の中で日々を過ごしている人たちもいるだろう。

今日はそんな人たちのために鎮魂歌を歌おう。私の歌はラクス様の様に人を癒す事も救う事もできないけれど、痛みに寄り添うことはできるはず。

いつも聞いてくれていた彼に恥じないよう、祈りと願い、心を込めて。

そして歌い終わったら今度こそ実行しよう。

とっくに出会っている彼と私が、本当に出会うために話しかけるのだ。

「私の歌はどうでしたか」、って。

そして、彼と私は出会う。

少しの痛みと大きな風を伴って。

それまでの私にとって、戦争は近いけれど遠い、別世界の物語だった。

そう。

貴方に、貴方達に出会うまでは。

n e x t

?

?

ミアアに話しかけられてから早3ヵ月。あれからミアアと俺は、頻繁に会話するようになっていた。

会話の内容は基本的に歌の事。そして地上の事だった。

ミアアは生まれと育ちがプラント育ちのコーディネーターには珍しいタイプだった。話しぶりから察するに、どうやらミアアは一度、実際に地上に降りてみたいらしい。

更に珍しい。反コーディネーター組織であるブルーコスモスに襲撃されることを恐れて、大半のコーディネーターはプラントに上がっている。

わざわざ危険地帯に行きたがるなんて相当変わり者だろう。そう思ったままに口にしたら、少しむくねながらも教えてくれた。

亡くなった母親がナチュラルだったのだと。地上の話を聞いて育ち、一緒に行こうと約束していたらしい。もはや果たせぬ約束となつてしまつたが、母親が話していた地上のことを少しでも知りたくて、こうして地上から来た俺に色々と尋ねているのだという。

だから地上 特に自然の有様なんかを知りたがっていたのかと納得した。俺が日本の四季について話すとても嬉しそうにしていた。

それにミアアは俺が読んでいる本にも興味を持つたらしく、内容を聞いて来た。図書館にあった本を手当たり次第借りているので、正直、俺自身もあまり内容をよく理解できていないことの方が多いけれど、そんな俺の説明もミアアは目を輝かせて聞いてくれた。

自分とは違った価値観を持った人との会話は良い刺激になるらしい。アーティストってのはよくわからない。

ディセンベル生活教練校を修了してからは、俺の求職活動につい

ても度々話題に上がる様になった。

「そう…あの会社もだめだったの」

「ああ」

俺の不採用の話聞いて、ミアは残念そうに肩を落とした。

「やっぱり、接客系は無理よ。シンが自覚なくても、他人から見れば無表情なもの。むしろ、私から言わせれば、どうして接客業の会社なんて受けたのか疑問よ」

「俺もそう思うよ…」

改めて指摘されると落ち込んでしまう。あまり自覚がないとはいえ、こつ何度も指摘されると嫌でも自覚を促される。

接客業だけは絶対にやめておいた方がいいとミアに言われ、ちよつと意地を張ってしまった自分が恨めしい。

「俺の成績を考えると、やっぱりプラントの外装修理かデブリ・ジャンク回収業辺りが妥当かな……一応工業用モバイルスーツ運用資格も持つてるし」

教練校で車の免許をとるついでに工業用モバイルスーツ運用資格を取っていた事を思い起こす。

「工業用モバイルスーツ運用資格って……あの試験、難しいことで有名なのよ？」

「そうか？ 結構、簡単だったんだけど…」

特に実技は簡単すぎてがっかりした位だった。

そう俺が言えば、ミアは唇をすばめて文句を言ってきた。

「簡単だったら、とつくの昔に私が資格取って働いてるわよ」

外装修理の仕事は給料が良いんだから、とミアはむくれている。その様を見ながら、俺はなんとなく、こついう時に笑えないのは不便だと思った。

ふと、ミアの髪に薄桃の何かがついている事に気づく。どこか見覚えのある形に思わず手を伸ばす。

「シン？」

ミアが小首を傾げ、再び何が見えなくなる。耳の陰に隠れたのだろう。

見えにくい。

俺の手は耳を掠め、その後ろの髪束を少し払う。

はらり、とひとひら。

薄桃の花弁がミアの肩に落ちる。

俺はそれをそっとつまむと、掌にのせる。

「さくら」だ…」

胸がつまった。

もうそんな時期なのだ。

オーブには桜はなかった。

だからみんなで約束していたのだ。

戦争が終わって、情勢が落ち着いたらすぐに日本へ帰ろう。そして、またみんな、隣の家族たちとも一緒に桜を、ヨシノの桜を見に行こう。

”約束”

「ねえ、シン…シンってば！」

はっと我にかえる。

横を見れば、ミアが心配そうに俺を見ていた。

「大丈夫？ 急に、いつも以上に目が虚ろになって無表情のまま固まってたけど…」

数度目を瞬きさせると、俺は口を開いた。

「大丈夫。ちよつと、懐かしく思っただけだから…」

まだ、あの”約束”を口に出して話す勇氣はなかった。

俺の様子に、不承不承ながらも納得したのか、ミアは視線を俺

の掌に移動させた。

「あら？ この花卉、”サクラ”よね？ どこで見つけたの？」

「いや、さつき、ミアの髪についてたから… 俺の方こそ、どこでこんなのかつけてきたのか聞きたい」

場所を聞いておかなければならない。当分、桜には近づきたくない。

「えーと… あ！ 多分、あそこだと思うわ！ ほら！ デイセンベル第三バイパス横の大きな並木道！」

「ああ…」

そこなら思い当たる。

寮から足を延ばすには少々遠いが、行けない距離ではない。数度前を通り過ぎた事もあった気がするが記憶にない。

「それにしても、早咲きなんだな。プラントの桜は」

日本の桜の開花時期は、だいたい3月中旬から下旬である。今は3月になったとはいえ、桜が咲くにはまだ早い。

「今年が開花時期を早めるってニュースで言ってたわ。だいたい1カ月位かしら？ 咲き続けて茶色く枯れるの」

「1カ月？」

聞き捨てならないセリフに、思わず俺は聞き返す。日本の桜は1週間足らずで散ってしまっていた。茶色く枯れると言言葉も気にかかる。

それに、開花時期を早めるとはどういうことだろうか？

押し黙った俺に、複雑な心境を察してくれたのだろう。ミアは仕方なさそうに肩を竦めた。

「シン。ここはプラントよ。天候システムの操作で、花の開花時期や開花期間を操作するなんて簡単よ」

「そうなのか…」

プラントという箱庭の世界で咲く桜はどうやら、日本 地上の桜とは違うらしい。

それならミアは、いや、プラントの人間は桜が風に散る様を、

花吹雪を見た事がないということか。とても残念なことだと思った。

一際強い風が吹く。

掌にあつた薄桃の花弁はふわりと舞い上がる。俺は花弁が天井の彼方に吸い込まれるのを静かに見送った。

サクラはとてもコーデイネイターに似ているのに。

天井の蒼に呑み込まれた薄桃の花弁を想いながらそんな事を考えた。

「シン？ シン？ 物思いにふけるのもいいけど、電話、鳴ってるわよ？」

ミリアの言葉に、俺はズボンのポケットに手をつ込む。木製の液晶保護カバーを裏にやり、ディスプレイの表示を確認する。

着信は メールだ。

「あら？ それってもしかして、leafの新型携帯！？ お願い！ ちょっとだけ触らせて！！」

横でミリアが何やら喚いている。そのあまりのハイテンションぶりに、俺はメールを確認もせずに携帯をミリアへ放り渡した。

leafとは、ブランドでも人気のパソコンメーカーだ。パソコンは勿論、携帯電話やタブレットPCなどなど色々と出している。

一枚の葉っぱを、虫が丸く一齧りしたようなロゴはあまりにも有名な、というのが、携帯を買ったお店の人の言である。

俺自身は、直感的で簡単に操作できてパソコンにも繋げるという点を考慮し、タブレットPCと合わせて購入した。

タブレットPCまで買ってしまったのは、そう、店員のノリに流されてしまったのだ。デスクトップがなければあまり意味がないのはわかってはいるものの、何故か買ってしまった。

絶賛後悔中である。

まあ、インターネットに繋げて、PCメールもできる為、求職活動の役には立ってくれている。

でも、やっぱり、あの出費は痛かった…

「いいなあ…やっぱり、leafから出てる商品って見た目も使いやすさもいいわよね」

見た目

そう、見た目なのだ。

一番気に入ったのは。

地上で、オーブで見かけた携帯電話とは似ても似つかないleafの製品群。求職に必要不可欠とはいえ、携帯電話を持つには少々抵抗があった。だからこそ、見た目が俺にとっては携帯電話とは思えないようなものを選んだのだ。

「保護カバーは木製を選んでのね。シリコンカバーもいいけど、こんな木製のもいいかも。なんだか温かみがあるし。でも、ストラップは付けないの？」

ミアの問いに俺は首を横に振った。

まだ、ストラップを買う勇気が俺にはない。

「ふーん… あ。じゃあ、せっかくだし、私のアドレス入れとくわね。そうすれば私の歌を直接メールに添付して送れるし」

「そうしてくれると嬉しいけど… 俺はディスクも欲しいな」

やっぱりディスクがあった方がいい気がする。特に理由はないけど。

そして、勿論、と付け加えておく。

「両方とも、ミアが直接歌を聞かせてくれること前提で受け取るから」

俺がそう言うと、ミアは嬉しそうに俺の携帯に自身のアドレスを送り始めた。

「あら？」

ちょうど互いのアドレスが交換し終わった頃。
ミアは声をあげた。

「3月10日。ユニウスセブンにて、停戦条約調印 決定」

俺は目を見開いた。

「これって……」

ミアが心配そうにしながら、俺に携帯を渡した。

俺はディスプレイを見る。

初期設定から弄っていない、ニュースヘッドライン。
流れていく文字。

何度も同じ文字が繰り返される。

3月10日。

ユニウスセブンにて、停戦条約調印

戦争が、終わる

n e x t

?

?

C・E・72 3月10日

ユニウスセブン跡上空において、地球連合とプラント臨時評議会間において停戦条約が締結。

C・E・71 2月5日に月面で起こった、地球側理事国の代表者と国連総長以下、国連首脳陣が死亡するという最悪のテロ「コペルニクスの悲劇」に端を発するナチュラルとコーディネイターの戦争は、この日を以って一応の収束を見せたのだ。

条約の中には、核エンジンおよびニュートロンジャマー・キャンセラーの使用禁止やコロイド技術の軍事利用の禁止、MS保有数の制限などが盛り込まれ、そして

P・L・A・N・TはProductive Location
on Ally on Nexus TechnologyからPeo-
ples Liberation Acting Nation
of Technologyへと改称。

名実ともに独立国家となったのだ。

戦争は終わった。

終わったんだ。

本当に ?

暗い部屋の中、俺はベッドに腰掛けて思考する。

悲願の独立を果たし、平和が訪れた。

これから良くなる。

何もかもが。

そう人々は口にする。

本当にこれからなにもかもが良くなるのだろうか。

本当に平和になるのだろうか。

本当に戦争は終わったのだろうか。

終わったのならなぜ？

俺は視線を床から、机の方へと移す。

そこにはディスプレイを光らせる携帯電話とタブレットPC、そして影になって見えないが、ピンク色の携帯電話がある。

同じ会社が作った携帯電話とタブレットPCには、どちらにも同じ画面が表示されているはずだ。

ミリアと別れた後に確認した受信メール。

その差出人は

Z . A . F . T : Z o d i a c A l l i a n c e o f F r
e e d o m T r e a t y (自由条約黄道同盟)

軍からの、勧誘

平和になったのだと、人は言う。

平和とはなんだ？
戦争とはなんだ？

平和を尊びながら、なぜ人は争うのか。

わからない。

わからない。

そもそも、平和とは作るものなのか？

それとも、守るものなのか？

わからない。

プラントに来てから、逃げるように沢山の本を読んだ。

今まで読んだ事もなかった哲学や心理学、果ては航空力学やプロ
グラミングの本だつて読んだ。

どんな本を読んでも、俺の中に答えは生まれなかった。

けれど、今、俺の中に生まれたモノがある。

ユニウス条約締結 停戦を聞いて、このザフトからの入隊勧誘を
見て、生まれた疑問。

俺の望む世界とは何なのか ？

俺が望む世界。

俺自身が得たいと願う世界。

それは一体、どんな姿をしているのか。

俺が望む世界。

父さんがいて、母さんがいて、マユがいて、じいちゃんがいて、
隣の幼馴染がいて

日本での暮らし、オーブで僅かながらも過ごしていた平穏な日々
そのもの。

ナチユラルもコーディネイターも関係なく、みんなが笑っている世界。

かつて僕がいた世界。

そう。

戦争がない世界

ユニウス条約の締結により、戦争は終わり、平和が生まれた。

戦争が終わるとはすなわち、戦争がなくなるということだろうか。戦争がない状態を平和というのだろうか。

ユニウス条約下の世界に戦争はない。

ならば、戦争のない世界の為に俺は何が出来るだろうか。

ベッドから立ち上がり、机へと近づく。

タブレットPCへと手を伸ばし、ロックを解除する。

表示される、メール画面。

ザフトからの入隊勧誘メール。

どうやら俺には、モビルスーツの運用に高い適正があるらしい。

それをザフトで活かしてほしい。

仰々しく飾られた文章の主旨はこんなところだろう。

工業用モビルスーツの試験 特に実技、が異様に簡単だとは思っていたが、それは俺自身の高いモビルスーツ運用適正故のものらしい。

ザフト 軍に、国に、必要とされる

じいちゃんが生きていたらなんと言っただろうか。

国家に必要とされる
それだけで泣いて喜びそうな気がする。

第三次世界大戦 再構築戦争。

若者は次々に戦場へ送られて行った。

しかし、重い遺伝性の病気を抱えたアスカの家の者 じいちゃんが徴兵されることはなかった。

同年代の友人達が次々に出征してゆく背を見送りながら、じいちゃんは何度も自分自身を呪ったと言う。

共に戦場に赴き、国の為に戦いたい。

けれど、我が身に流れる血が連綿と受け継ぐ忌まわしい病がそれを許さない。

どんなに心が戦う力を欲しても、肉体がそれを許さない。自分自身ではどうにもならないからこそ悔しかった。

遺伝性の病を抱えているのだからしかたない、と慰められる度に、何が分かって言い返しそうになる自分を必死に抑えていたという。

兵士になり、国の為に戦うことが賛美されていた時代だった。

それを成す事の出来ぬ我が身の不甲斐無さ嘆き、じいちゃんは愛する祖国の為に何かできないか必死に考えたらしい。

兵士になれないのなら、せめて後方で役に立ちたいと決意し、じいちゃんは難関の大学へ進学する為に猛勉強した。

そして見事、難関大学への進学を果たした。

全てがこれからという時だった。

それが訪れたのは。

終戦

じいちゃんが愛した祖国はなくなった。

“ここはじいちゃんが、僕達が愛した”日本”という地ではない。むしろ、見ようによっては敵国なのかもしれない。

僕達家族が、オーブに移住するきっかけとなったのは空の化け物プラントのコーディネイターによる、ニュートロンジャマー投下なのだから。

そう言つと恐らく、プラントのコーディネイターはこう返すだろう。

”血のバレンタインの報いだ”

今回の停戦条約の締結地となったユニウスセブン。核攻撃を受け、壊滅したコロニー。

その悲劇こそが、今回の一連の戦争の発端だと、プラントのコーディネイターは思っている。

けれど、地上にいた僕に言わせてみれば、それは違つと言いたくなる。

一連の戦争の発端は間違いなく”コペルニクスの悲劇”だろう。プラントのその理事国の間で持たれるはずだった国際連合主催の会議。月面にて行われるはずであったために、月面会議と呼ばれるその会議は双方話し合いのテーブルに着くことなく終わった。

爆弾テロによる地球側理事国の代表者と国連総長以下、国連首脳陣死亡という最悪の結果を残して。

この最悪のテロには唯一の生存者がいた。

シーゲル・クライン

プラント側の代表だ。彼は搭乗していたシャトルの故障により遅刻し、月面会議の参加者の中、唯一人この難を逃れている。

不可解な生存。

真実の奈辺がどこにあるにしろ、シーゲル・クライン議長のみ存命という動かしがたい事実は地上のナチユラル及び地上在住のコーデイネーターに根強い不信感を齎した。

そして、瓦解した国際連合は発展解消され、誕生したのが O . M . N . I : Oppose Militancy & amp ; Neutralize Invasion 地球連合だ。

なんのことはない、プラントはプラント自身の手で、自身の敵を作りだしたのだ。

ナチユラルとコーデイネーター。

かつての歴史の教科書で習った、第一次世界大戦や第二次世界大戦での、宗主国と植民地の関係に似ている気がする。

けれど、もしそうだとするならば、歴史は繰り返されているということになる。かつては民族というしきりで、現在はナチユラルとコーデイネーターというしきりで。

妬しいから、妬んで。

疎ましいから、疎んで。

憎らしいから、憎んで。

傷つけられたから、傷つけて。

撃たれたから、撃ち返して。

人は何度も何度も、同じ事を繰り返している。

今回の戦争の発端は間違いなく”コペルニクスの悲劇”だろうが、そもそも、月面会議が開催されるまでの経緯も複雑だ。経緯を見れば、プラント側の言い分も理解できない訳ではないのだ。

何が正しいのか。

何が悪いのか。

どんなに沢山の本を読んでもわからなかった。

わからない。
答えが出ない。

俺はメール画面から視線を少しずらす。
タブレットPCのディスプレイが放つ光を僅かにつけ、それは輪郭を暗闇に浮かべる。

マユの携帯電話

視線をメールに戻す。

ここはプラント。

日本ではない。

けれどプラントは、俺に力を与えようと言っている。俺達アスカの家の者がどんなに望んでも得られなかった力。

戦う力を。

けれどそれは

オレンジ色の閃光

青い翼のモビルスーツ

土煙が晴れた先の壊れたセカイ

あの光景が脳裡を過ぎる。

あの青い翼のモビルスーツと同列になるということだ。

無辜の民に死を振り撒く死神に。

あんな奴と同列になってまで、”戦う力”は求める価値のあるものなのか？

俺は再びマユの携帯を見る。

震える手を伸ばし、少し重い、小さな携帯電話を手取る。折り畳み式のそれを、俺はあれから一度も開けていない。充電を怠らず、肌身離さず持ち歩いていても、どうしても開く事ができなかった。けれど今、俺は携帯電話を開こうとしている。

隙間に指を入れ、開く。

真っ黒

携帯電話の小さな液晶は真っ暗だった。

そういえば、充電はしていても電源を入れていなかったことを思い出す。

馬鹿みたいだと自分を嗤いながら、俺は電源へと親指をやる。手が、指が、震える。

ほんの数秒、押し続ければいいボタンを押さえ続けられない。

携帯を持つ右手を左手で押さえつけ、ボタンを押し続けさせる。

起動する携帯電話。

立ち上がる画面。

待ち受け画面の中で僕達が笑っていた。

携帯電話を買ってもらったその日に、マユがカメラ機能で撮っていた一枚だった気がする。

俺はデータフォルダを開き、更にカメラのフォルダを開く。

父さんが笑っている。

母さんが笑っている。

僕が笑っている。

ああ、これは僕がマユの携帯を借りて撮った写真だ。

こっちはマユの誕生日会の写真。

オーブの家の周りの写真。

これはオーブの海に行つた時のだ。

僕はボタンを押し、次々に写真を見て行く。

もっと。

もっと。

もっと。

写真が一番最初に見た物に戻る。

そう、一番最後に撮られた写真に。

それは僕がホットミルクを入れている姿だった。

日付はあの日。

71/06/15

どうやらマユは、僕の気が逸れている隙に携帯を弄っていたらしい。

あ、と思いだし、僕はデータフォルダからメインメニューに戻り、あるモノを探す。

携帯電話を買ったその日、既製のものが気に入らないと、マユが吹き替えていたモノ。

設定

留守電機能

再生音声

ボリウム

最大にして、俺は確認のボタンを押す。

『マユです！マユはいま、でんわに出ることができません。ピッというはっしんおんのあとに、メッセージをいれてください！』

ああ！！

俺は何を迷っているというのだろうか！

力がなくては何も守れない！！

力がなかったから、僕の守りたいと思ったもの全てがこの掌から零れ落ちて行った！！

今の俺には何も無い！！

何も無い！！

守りたいものなど、何一つない！！

俺はもう一度マユの声を聞こうと、携帯電話を操作しようとする。しかし、液晶の画面は省エネの為、真っ暗になっている。

「力がなくちゃ、何も守れない ……」

気付けば発していた言葉は、俺の中の心情に反して、冷たく平坦だった。

真っ黒な液晶には俺の無表情が映っている。こんな時にすら、壊れた俺は涙一つ流せない

それが余計に僕の心を煽る。

ずっと、このままでいるつもりなのか、と。

表情を失くし、感情は壊れ、何一つ持たず、空虚なまま生きていくのか、と。

「力が欲しい ……」

今の俺に、大切なものは何一つない。
けれど、ずっとそのままでもいいはずがない。
いつか俺も、大切なものを得るはずだ。

「戦かう力が欲しい」

大切なものを守る力を！

今は何も持たなくても、いつか得る大切なものを守る為に！
力を！

戦う力を！！

俺はマユの携帯を机の上に置くと、タブレットPCに指を滑らせる。

そして、メール本文のURLに触れる。

入隊志願書

必要事項を記入

キーボードを呼び出し、次々に記入してゆく。
多くの必要事項を記入し、後は送信ボタンを押すのみとなった。
迷いなく、俺はその送信ボタンに触れようとする。

瞬間。

脳裏に過ぎるあの光景。

壊れたセカイ

今度は俺自身が、誰かのあの光景を作りだす事になるのかもしれない。

一瞬の逡巡。

それでも、それでも俺は、僕は

送信ボタンに触れる。

それでも僕は力が欲しい。

n
e
x
t

？

？

決意の日から1週間。

俺は今、アカデミー ザフトの士官学校の寮にいた。

士官学校の寮は二人一部屋が基本らしく、ベットが二つ備え付けである。簡易キッチンやシャワーもあり、基本的なルールを作れば二人の人間が余裕を持って暮らせるだけのスペースはあるだろう。

同室の人間はまだ来ていない。

それも当然だろう。何せ、まだ入学しまで1週間以上ある。

生活教練校の寮暮らしだった俺は、士官学校の寮の入寮可能日すぐに入寮したのだ。私物などほばないに等しく、私服や下着全てが少し大きめの旅行鞆一つにまとまった。

それらの整理も既に終わり、俺は一息ついて部屋を見回しながら、これまでの事を思い返した。

入隊の為の試験や検査があると身構えていた俺の下に来た返信メールの内容は意外なものだった。

それは士官学校への推薦状。

ザフトは志願制の軍だと聞いていた。俺には工業用モビルスーツ運用資格取得の件もあるので、志願したら即入隊かと思っていたがどうやら事情が違うらしい。

最初に来た勧誘メールと返信メールを見比べ、俺は自分自身の早とちりに気づく。

返信メールを読み、いろいろ調べてみると、どうやらユニウス条約締結によるプラント独立に伴いザフトの士官学校が新設されることが決定したようだ。

以前は形式的には理事国の管理下ということもあり、ザフトはプラントの有様を憂う志願者が組織する民間の義勇軍という体裁をとってきた。しかし、一つの国としての独立を獲得した今、必要なのは本業を別に持つ志願兵ではなく、職業そのものが軍人である職業軍人である。国家として、国民を守り、独立性を維持するには職業軍人は必要不可欠だ。

そこで決定したのが、職業軍人を作る為の士官学校の設立である。士官学校そのものはザフトの創建と共に設立されていたが、それはどちらかという民間からの志願兵に一通りの軍事訓練を施し、少しでも早く戦場へ送り出す為の機関という、本来の意味での士官学校とは程遠い場所だったらしい。

そういった事情もあって、これを機に、国防の為の専門的軍事教練を施された士官の育成を行う士官学校の新設が決定したようだ。

俺にはそこで、専門的軍事教練を受けた上で、士官としてザフトで活躍してほしいのだという。

“モビルスーツに乗って戦う”兵士”ではなく、ある程度の部隊指揮の能力を持った”士官”を必要としているらしい。

教練期間は1年。この期間が長いのか短いのか、軍事に明るくない俺にはよくわからない。

だが、ザフトに対する俺のもともとのイメージが、個々の能力に絶対的な自信を持ち、前線の兵士に幅広い判断を任せている、というものだっただけに、このメールの内容には驚いた。やはり、独立して一つの国として存在するようになると、国防に関する見解も変わってくるものなのだろうか。

そんなことをつらつらと思いながら、俺は士官学校への進学手続きの書類を記入して送信した。

そして返って来たのが筆記試験免除の知らせと寮の入寮手続きだった。

筆記試験は、俺が持つ工業用モビルスーツ運用資格のおかげで大半が免除され、他にも教練校で手当たり次第とった資格が効力を発

揮した。教練校での成績がそのまま持ち上げられる事になり、事実上、全筆記科目免除ということになったのだ。

これには驚いた。教練校に入れるように手続きしてくれたオーブのトダカさんには本当に感謝の念が尽きない。

そういえば、プラントに発つ俺を見送りに来てくれた時、トダカさんが言っていた。俺がプラントに渡れるように手助けしてくれた人が別にいる、と。いつか、その人にも直接お礼を言いたい。

そう思いながら俺はLeafのタブレットPC LeafFleetに送られてきたこれからのことを指示する書類に目を通した。

次は入寮手続きだ。

士官学校は全寮制なので、入学式までに入寮日を指定して入寮しなければならぬ。

一番近い入寮日は来週の水曜日。その日を指定して、必要書類全てを送信する。

送信完了を確認すると、すぐに俺は荷作りに取り掛かった。

それから数日間を、荷作りや教練校の退寮手続きなどに費やしていると、水曜日はあつという間にやってきた。

ザフトの士官学校があるのは奇しくも、近づくまいと誓ったディセンベル第三バイパス横の桜並木の先だった。

絢爛豪華に咲く桜を視界に極力視界に入れない様に俯き、急ぎ足で桜並木を抜ける。

門の横にある守衛室に顔を出し、警備員に入学生である事を伝え、教練校の寮でプリントアウトした書類を見せた。警備員は一瞬驚いたように書類と俺を見比べると、すぐに笑顔になって中に入れてくれた。

俺は警備員からもらった地図を見ながら、書類を渡す為に管理棟を目指した。幸い、管理棟はすぐに見つかり、書類を係りの人に提出する。そのかわりに、士官学校の規則や寮での規則、訓練科目の概要などのデータが入ったディスクと寮のカードキーを渡された。

パソコンは学生一人にデスクトップが1台宛がわれるらしい。ありがたく思いながら、俺は寮への道を急いだ。

そうして俺は寮の部屋にいる。今までの事を思い返しながら荷物の整理をしていたら、あつという間に時間が経ってしまった。

時計を見ると、時間はすでに13時を過ぎている。以外に長く作業をしていた事に驚きつつ、俺は昼食をどうすればいいのか考え始めた。

部屋には共用の冷蔵庫が備え付けてあるが、当然中身はない。

先程もらった地図を取り出し、食堂の場所を確認する。

食堂は開いているのだろうか。

寮への受け入れが始まっているのだから、食堂もきつと営業しているだろう。していますように。

そう思いながら、俺はカードキーとタブレットケースを手にとった。

校内の散策や、実践も兼ねた校内アルバイトの申請などの諸々の手続きをしている内に、時間はどんどん過ぎて行った。

気付けば、入学式まで丁度1週間になっていた。

この頃になると、ちらほらと同期の姿が見え始め、士官学校内にもわかに活気づき始めていた。

そして、ついにと言つべきか、ようやくと言つべきか。俺の同室者もやってきた。

そいつの名前はレイ・ザ・バレル。

レイ・ザ・バレルが部屋に入って来た時は、なんとというか、そう、身に纏う空気に首を傾げた。

何かが、違う。プラントはコーディネイターの国だ。だから、目の前にいるレイ・ザ・バレルもコーディネイターであるはずなのだが

既視感？ 懐かしさ？ 切なさ？ 申し訳なさ？
いろいろなもの縋い交ぜになった感覚が俺を襲った。

それが一体何なのか。レイ・ザ・バレルとこの部屋でのルールを決める為に色々と話している内に気づいた。

同じ感じがするのだ。地上にいるナチュラルの親友と。

見た目は勿論、二言三言話しただけでもわかる性格も違うのに、何故か俺は親友とレイ・ザ・バレルの間に共通する何かを感じた。その正体はいったい何なのか、皆目見当もつかず、俺は一旦、その件に関しては思考を止めることを決定した。

「それでは、同室で過ごすにあたってのルールはだいたいこんなものでいいか？」

レイ・ザ・バレルの言葉を、俺は肯定する。

「ああ」

互いに簡単な自己紹介をした後すぐに行ったのが、この部屋でお互いが快適に過ごす為のルール作りだった。ルールといっても、「互いの私物は触らない」や「洗濯物の当番」なんかの必要最低限でありきたりなものばかりだ。

「だが、本当にいいのか？私の要望ばかり通してしまったが、先にこの部屋を使っていたのは君だろう」

どうやら俺側からの要望が少ない事が気になるらしい。

俺に言わせれば、レイ・ザ・バレル側からの要望だって多い訳じゃない。むしろ、俺とレイ・ザ・バレルの要望が殆ど合致した為、俺側からの要望が減ったというのが正しい。

「いいよ。お、僕が言おうとしてた事、だいたいバレルさんが言うてくれましたし」

「レイ、と呼び捨ててくれて構わないと先程から言っているだろう。」

私と君は同期だ。気負わなくてもいい」

そう言われても、と俺は内心唸る。会って数分もしない人間を呼び捨てるなんて失礼な気がする。何より、レイ・ザ・バレルの纏う雰囲気が無駄に緊張感があつのでつい、口に吐く言葉が丁寧になつてしまうのだ。

ひとしきり考え、俺はレイ・ザ・バレルに提案してみた。

「ならこうしま あー… こうきめよう。俺と、レイとの間では敬語もなし。フランクに。普通に話す。それでいいか？」

「ああ」

俺からの提案に、レイは満足そうに頷いた。

レイは一見、無表情に見えるが、実は感情豊かなのがこの短いやりとりでなんとなくわかった。俺みたいな無表情、というよりはただ単に仏頂面なだけなんだろう。

話題も一段落着いた所で、俺はレイに提案してみた。

「レイは今日来たばかりだろ？ 俺でよければ校内の施設を案内するけど必要か？」

この士官学校はそこそこ広い。俺も慣れるまでに結構時間がかかった。

「ああ、頼む。俺もこの後に施設の確認をしようと思っていたんだ」
口調は相変わらずだが、一人称が”私”から”俺”に変わっていた。

なんだ、レイも緊張してたのか。

なんだかほつとして和んだ。

「へえ… レイはピアノが弾けるのか」

校内を案内する道すがら、互いの当たり障りのない話しを交わす。

ピアノが弾けると言う言葉に、俺はやっぱりと得心した。そんな顔をしてる。

「ああ。手慰め程度だがな。そういうシンは、何か楽器が弾けるのか？」

レイの手慰めがどのぐらいなのか、今度聞いてみたいと思いがながら、俺はレイの質問に返す。

「俺はそういうのさっぱり」

音楽の成績はいつも可もなく不可もなくの至って普通のものだ。それでも、音楽を聞いたり歌ったりするのは好きだったが、楽器の演奏には興味が持てなかった。

一度、ミアにギターを借りて弾かせてもらったことがあったけどすぐに返した。

右手と左手を別々に動かすのがかなり難しかった。慣れたら誰でもできると言っていたが、俺が慣れるには当分かかりそうだった。

ミアはアレを弾きながら歌うのだから本当に凄い。

けど、俺のギター演奏を聴いて笑い転げていたのは絶対にゆるさない。いつか絶対に、楽器演奏でミアを驚かせて見せる。

「あー、でも将棋や囲碁なら少しできる」

流石に、あまりにも楽器が弾けなさすぎて笑われたことを話すのは恥ずかしかったので、かわりに俺が出来ることに話題をすり替える。

「シヨーギ？ イゴ？」

物知りそうなレイの声音に少し不思議そうな気配が混ざる。

プラントには囲碁や将棋がないのだろうか。

「どっちもじいちゃんから教わったんだ。将棋は、まあ、チェスみたいなもの？」

全然違う、というじいちゃんの怒鳴り声が聞こえた気がしたが、それ以外にわかりやすい喩えが思い浮かばなかった。

「ごめん、じいちゃん。」

「チェスなら俺も少しできるな。良ければ教えてくれないか？」

どうやらレイは将棋に興味を持ってくれたらしい。将棋も囲碁もチェスも相手がいないければ成り立たないゲームである。相手ができることは願ってもない事だ。

「いいよ。そのかわり、レイも俺にチェスを教えてくれよ。ついでにピアノも」

「？ チェスは別に構わない。簡易チェスボード程度なら持ち込んでも良かったはずだからな。だが、なぜピアノも？」

「うっかり口に出してしまっていた蛇足に、レイが反応した。滑ってしまった自分の口を呪いながら、俺は答えた。

「その… 一度友達のリコーを貸してもらって弾いたら爆笑されて… 何か楽器が弾けるようになって、絶対に驚かせたいんだ」

結局言う事になってしまった俺の恥ずかしいエピソードに、レイは目をぱちくりさせた。

そしてクスリと穏やかな笑みを零した。

「了解した。お前の名誉が回復できるように尽力しよう」
ククツとお腹を抱えるレイの頭を、俺は思いっきりはたいてやった。

俺が特に入り浸っている図書館とシュミレータールームも案内し終え、案内する場所は残り1ヶ所になった。

あつて当たり前だが、あまりお世話になりたくない、そんな場所だ。

「ほう… シンは工業用モバイルスーツの運用資格を持っているのか」
シュミレータールームを出た後はやはり、モバイルスーツ関連の話が話題の中心になる。

「うん。俺は入寮可能日からここにいるけど、今日までずっと図書

館とシュミレータールームに入り浸ってた。やっぱり、工業用と軍事用だとシュミレーターも大分違うよな」

工業用と比べると、軍事用のシュミレーターで出来る事は圧倒的に多い。色々と設定をいじりながら毎日入り浸っている。最近はOSを弄ることもしだしたのだが、教本を見ながらなのでなかなか上手くないかない。

「レイもパイロット科だよな？ 何か特別な勉強でもしてたのか？」
確か自己紹介の時に、レイもパイロット科だと言っていたはずだ。俺の知識は教練校でのものが大半なので、出来れば色々と教えてもらいたい。

「…………… きょう、だいがモバイルスーツパイロットをしていてな。その人から色々と手解きをしてもらったんだ」

歯切れの悪い言葉に俺は首を傾げた。

「レイには兄弟がいるのか？」

「ああ。兄、が、いた」

過去形で語られるそれに、俺は目を細めた。

「あ。そろそろ着くぞ」

強引に話題を変える。

互いに触れてほしくない部分は沢山ある。ましてや、俺とレイはまだ初めて会ってから1日も経っていない。そんな人間が聞いていい事ではないだろう。

レイの手を引き、少し歩調を速める。

「もうすぐ夕食だし、急ごう」

目的地に着くと、俺はレイの手を離れた。

「ここが医務室だ。お互い、あんまりお世話になりたくないよな」
コーディネーターに病気は少ないとはいえ、訓練中に怪我などは付き物らしい。その治療の為の場所として、医務室はあるらしい。そして医務室には別の役目として

「うおつ、危ないな。ん？ シンじゃないか」

俺達の目の前で扉が開き、中から人が現れる。

「こんにちは、リック先生。レイ、この人がこの医務室の主だ」

既に何度か顔を合わせた事のあるリック先生をレイに紹介する。

俺はこれから度々医務室に顔を覗かせる用事がある。リック先生とは、その旨を伝えに行った時に親しくなった。

「おお、君がシンの同室の子だね？ 私はリック・マウアー。専門は平たく言えばカウンセラーだよ」

そう、ここの医務室はカウンセラーを常駐させているのだ。

なんでも、訓練の最中に色々あるらしく精神的な治療を施す事案が偶にあるらしい。士官学校と言う特殊な学校であるが故に、らしい。

「ちょうど良かった。シン、今から君の所に行こうと思っていた所だったんだ」

リック先生は手に持っている袋を俺に手渡してきた。

「新しい薬だ。今日届いてね。何かあったらすぐに来るんだよ。

レイ君も」

そう言つて、先生は忙しいのか立ち去っていた。

その背を見送りながら、レイは俺に尋ねてきた。

「シン、君はやはり何か病にかかっているのか？」

”やはり”、とつけて来る辺り、レイも薄々感づいているのだろう。

「気づいてるだろうけど…俺の顔、表情ないだろ？」

レイが頷く。ならば、隠しても仕方がない。

「病気なんだ。心のな。俺は普通に笑ったり怒ったりしてるつもりなんだけど、顔面の筋肉が何故か動いてくれないんだ。これは、まあ、その病気の為の薬」

俺は袋を示す。

「君は…病であることを隠さないのか？」

ミーアから聞いた事がある。コーディネイターの中には、病気に

かかる事は不名誉であるという風潮があるのだと。

病気にかからない様にコーディネイターの遺伝子は調整されている。にも関わらず病気になるなど、コーディネイトが失敗したとしか考えられない。

ウイルス性だろうが心因性だろうがなんだろうが、白い目でみられるのだという。

「隠してどうなるっていうんだ？ 俺の場合は顔っていう隠しようのない場所だ。仮面でもするなら話しは別だろうけど、なんかめんどくさいし。それよりは、最初から病気のこと伝えてた方が楽だろう？」

そう、隠した所でいつかはバレる。その時に、何故黙っていたとか、色々と問い詰められるより、最初から公言していた方が楽だろう。

「病気も、俺自身 シン・アスカの一部って認識してもらった方が、少なくとも俺はいい」

そう言つと、レイは怪訝そうに尋ねて来る。

「何故そう思う？」

なぜと聞かれても困る。

「なぜって……俺の家の家訓？ じいちゃんからの受け売りなんだ。コーディネイト技術のおかげで解放されたけど、俺の家は遺伝性の病気を抱える血筋だったから」

豪快に笑っていたじいちゃんの事を思い出す。

いつも元気で、病気とは無縁そうに見えるじいちゃんの体には治しようのない病魔が巣食っていた。それすらも自分の一部と豪語出来るじいちゃんは本当に強い人だったのだと思う。

「……そうか」

レイも何か思う所があるのだろう。複雑そうな顔をしている。

「気になるか？」

「いや、気にしない。病気も含めて、お前自身なのだろう？」

俺の問いに、レイは即答してくれた。

まっすぐに俺を見て来る空色の瞳に、思わず俺は俯いた。
「……………」
「ありがとう」
俺が出会う人はどうして、こんなにも優しく、良い人ばかりなのだろうか。
喜びで溺れそうだ。

就寝時間

その後、食堂で食事をとると、俺達は早々に部屋に戻った。交代でシャワーを浴び、早々に床に着く。
隣のベットからレイの気配を感じる。

誰かの傍で眠るのは久々だった。
そのせいか、なかなか寝付けない。どうやら自分が思っている以上に、緊張も高揚もしているようだ。
そういえば、と思います。

ミアにザフトの士官学校に入る事を伝えていなかった。

あの日 ユニウス条約締結決定のニュースと一緒に見て以来、ミアには会っていない。

ベッドサイドテーブルに手を伸ばし、Leafの携帯を手取る。

”ザフトの士官学校に入った。休日には歌を聞きに行けそうだけど、それもまちまちになりそう”

用件を入力し終え、俺はメールを送信しようとした。だが、何か引っ掛かる。

俺はもう一度文面に目を通す。

「……」
目を瞬かせ、俺は文章を追加する。

” ごめん ”

今度こそ、送信ボタンを押す。次に会った時が怖い気がしたが、そこはスルーしておく。

送信を確認した後、ベッドサイドテーブルの引き出しからイヤホンを取り出し、Leafの携帯と繋ぐ。

イヤホンを耳に装着し、音楽を再生する。

流れて来る優しい調べ。

ミアの歌。

俺は枕の下からマユの携帯を取り出すと、音を立てない様にして開く。

待受画面では、相変わらず僕達が楽しそうに笑っている。

「父さん、母さん、マユ」

僕、頑張るから。

絶対に、戦う力を手に入れて見せるから。
だから見てて。

心の中で呟く。

”何を” と問う内なる声は聞こえないフリをした。

n e x t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6317x/>

Memento mori - 或は死者の為のミサ

2011年11月28日01時06分発行